



むかしのはなし

— 衝派の術師たち —



きんどんてい
金井亭

にゃんこう
猫好

目次

口上

第六回 闇に降る雪 …………… 三

番外一 いのちの綱 …………… 二七

番外二 ときはながれて …………… 七二

あとがき …………… 一〇〇

さて、むかしのはなしであります。

今で言うなら中国の西方、岩だらけの地にぼつりとできた森の城郭『緑宝寺』を拠点とし、正体不明の化け物『空魔』の気配に敏感すぎる者たちが、護身のために寄り集まった術師集団『衝派源流』。

その術師見習いである雷遊子は、師に託された呪具『盤印』の使い方を知るため、大変な旅を続けております。

変な連中に追われながら、さてはて、旅はいつまで続きますやら。

まずは総集編『衝派の術師たち』どうぞご覧ください。

イラストレーション……水瀬 霖生

酒処 金井亭 亭主敬白

3 第六回 闇に降る雪

第六回 闇に降る雪

ここに、一幅の対聯がある。

その一つにはとある術師が述べた言葉が、もう一つにはまた別の術師が発した言葉が、それぞれ記されている。

この二つの言葉は、まったく違う時、違う場所において、お互い知らずに口にしたものである。だが偶然にも、二人の対照的な性格がよく現れており、のちに衝派源流の宝の一つとして緑宝寺に納められることになった。

左の聯にいわく

闇夜に雪の降るごとく

幽かそけき白は黒に溶けゆ

右の聯にいわく

闇夜に雪の積むごとく

幽かそけき光大地を染めゆ

—— 鴻こう妙みょう連れん

二人がいかなる人物であったのか、数少ない資料から追って行くのは困難である。ただでさえ衝派の資料は少ないのだが、宝にまでなるほどに有名であったはずのこの二人、特に前者の名は、他では見ることができない。

衝派はむしろ、この人物に触れることを、避けているようにさえ思える……

『術師録』衝派の章より抜粋

二

—— 秀しゅう泉せん碓たい

町角で商売をする者がいる。

その店が出はじめたのはいつごろからなのか、町に住むだれ一人として知らなかった。不思議がる者がいないのは、知らないことそれ自体、気付く者がいなかった証拠である。

ともあれ、その日もその店は開いていた。

城郭にほど近い、人気の少ない場所にある古い家、昔は幾多の盗人を阻んだであろう、白粉の剥けた壁のその前に、似つかわしいと言つても失礼にあたらぬほど古ぼけた机が一つ。

上にかけてあるのは、日に焼けて茶になつた木綿の布きれ。通りへ面した部分には一文字大きく『易』と書かれている。

してみると、机の上に置いてあるものは、筮竹のつもりであろうか。割つたままで太さも長さもまちまち、あちこちにくびれやささくねが目立つ竹が數十本、なかば枝のついた竹の器に、ただ無造作にぶち込まれている。これでとなりに湯でも沸いていれば、そば屋と間違われかねない。

机の後ろには、男が一人。よれた十徳帽からはみ出たぼさぼさの髪。薄汚れたねずみ色の袴。袖からは、ひものような腕が、襟からは漬け物のような首が、それぞれにゆつと突き出している。

このような店にだれが来るといふのか？ 商売をするのによい場所でないことは間違いない。

しかし、その日もその店は開いている。

三

「ちよつと休みましょあよあ」

十を過ぎたくらいの少女が言つ。うす緑の着物に黒っぽい綿入れ。腰より少し短い髪を編み上げて後ろにたらし、大きな目に疲れをためながら、足を少しだけ引きずるように歩いている。

「あとちよつと、頑張るよ彩ちゃん」

応えたのはその前を行く、少女よりちよつとだけ背の高い少年。こちらは少しくすんだ蒼の衣に革の

5 第六回 闇に降る雪

上着。旅草履せうりの先はずいぶんとほつれ、彼の長旅を十分に物語っている。右肩に葦の笠、左肩には荷物の袋。おそらく少女のものであろう、うす紅色をした幅のある木綿ひもでまとめられた髪が、歩きたび尻尾のように揺れている。

あたりは一面荒れた畑。脇に小さな川。その中に、疲れた様子の子供が二人。

人がいない。ここ数日、だれにも出会っていない。これほど広い道なのに。…もっとも、これは今が初冬であることを考えれば、納得できないでもない。だが、疲れを引きずって歩いている子供たちが、そんなことに気付くはずはなかった。

泊まる家もない。野宿は慣れた少年だが、こうも続けば嫌にもなる。

恐さがないといえはうそになる。現に少年、雷遊子の指は震えていた。子供だけの旅だからではない。ついこの間までは、一人で旅していたのだから。それだ

けに、自分が気弱になったことを認めたくなかった。「ほんとは行くのお？」

彩花の声がややふてくされたように聞こえる。

「いくのー」

言いながらその手を掴む。と、手に妙な震えをおぼえた。少女、彩花さいかもまた震えていたのだ。雷遊子はそのまま、手を引つ張りながら歩いて行つた。後ろからのくすくす声は、とりあえず無視することにした。

しばらくして、雷遊子はふたりの手から震えが消えて行くのを感じた。手と手の触れあうその場所から、身体中が暖かくなるように思えた。

やがて、目の前に家ほどの高さの壁が見えた。

県城の門をくぐる。子供二人は特に怪しまれることもなく、すんなりと中に入れてもらえた。

城門からまっすぐに延びる一本の道。その足元が

見えないほどの人、また人。周りには、今まで通った町の何倍もの店の列。

二人が来たときは、市の真っ只中だったのである。右を見ればお菓子に果物、左を見れば芸人に見世物。大きな市を見たことのない子供たちには、もう全身これ好奇心の塊となつて、人の河の中へ飛び込んでいった。

二人は——恐らく旅の間に覚えたのだろうか——懐の財布をぎゅつと握つたまま、歩いていった。

お菓子の山の前で涎をたらしかけている雷遊子。その首に腕を回し、彩花が強引に引き剥がす。

かと思えば、芸人の衣装に見惚れる彩花の腕を、雷遊子がぐいぐいと引つ張る。……もつともこちらの場合は、彼女が飽きて離れたと言つた方が正しいが、ともかく、二人とも久しぶりにはしゃぎ、笑い、そして……お腹が空いてきた。雷遊子はすぐ近くに見つけた饅頭屋を指差して、

「あそこで食べようか、彩ちゃん」と、後ろを振り

向いたが、少女の姿がない。

右を左を必死の形相で見回しながら、雷遊子が叫ぶ。

「彩花ちゃん!!」

叫び声は、すぐにあたりの喧騒に紛れてしまった。

四

「迷つたわね」

彩花は頭を掻いて空を見上げた。やや黄色みを帯びた雲が、空全体を包み込んでいる。ふう、とひとつため息をつく。どう考えても、あの人ごみで雷遊子を見つけれられるはずがない。そんなことは子供の彼女にもわかつた。

「しかたない、か。この中にはいるんだし、そのうち会えるわ」

半分は自分に言い聞かせるようにして、そのまま歩きはじめた。

いつのまにやら人気がなくなる。背丈の四倍ほど

7 第六回 闇に降る雪

もある壁の脇。木々の間に、倉のような建物がぼつぼつとある。その一つにへばりつくように、店が出ている。近寄ると大きな『易』の一字が目に入る。

少女はその前まで来て、ぼろぼろの椅子にちよいと腰をかけた。少しの間、目の前の男を眺めていたが、「おじさん、占いの？」と声をかける。

男は目を開けずにくくりと肯く。

「えと、一緒にいた子が、いまどこにいるか教えて欲しいの。…お金、ないけど……」

易者は目蓋を開き、軽く笑って言った。

「いいよ。私も暇だったところだ。誰を探すかね」

彩花はまだ不安そうに相手を覗きこみながら

「その、名前がいい？」「雷遊子」って言うの。雷で遊ぶ子」

その名を聞いた瞬間、易者の動きが止まった。そして、一瞬だけ厳しい表情になり…すぐにその表情を隠して笹竹を振るった。

「ふん。会えればいいんだね。それなら、私の家に

来なさい。そのうち、彼は私のところに来て来る。そう出ている」

少女の顔が輝いた。

「ほんと!? あ…本当にお金ないんだけど、もし来なかったら、泊まっていたいい?」

あまりの態度の変化に、易者は呆れながら肯いていた。

五

「風遊子、そろそろ場所を見てくれないか」

荒れた畑の中、四十前後の男が言った。杖を持った小柄な男ではあるが、皺の交じるその容貌は、威圧感すら感じさせる。

脇を歩いていた十くらいの子供が、男の言葉を受けて懐から掌ほどの玉を取り出すと、暖めるように右手をかざした。

しばらくすると、半透明の玉にぼうつと光の点が

浮き出して来た。緑の点がひとつ。だいぶ離れて赤い点、そしてそれに重なるように燈色の点。

「だめです。重なってて、どっちの方向かわからな
いや」

少し肩を落とした少年の背中を、男がぼんぼんと叩いた。

「まあやむない。それだけ近づいたということだ。もうすぐ、雷くんに追い付けるぞ」

言いながら懐から地図を取り出す。

「ふ…む。すぐ近くに、町ががふたつあるな。」

よし、二手ふたてに別れよう。きみは大きな泉城の方に
行きなさい」

こくり、と小さな頭が動く。

「鮑采ほつさいさんは？」

「私はこつちの小さな村を探す。居てもいなくても泉城の方へ行くから、きみはそこで待っていなさい

あ、それと…」

すでに場を離れかけていた風遊子が、え、と驚い

たように振り返る。

「泉城のような大きな町では、あまり術を使わないように。…場合によっては、他人ひとが巻き込まれるからね」

少年は、よくわからないような表情で、それでも一つ二つなずくと、大きな壁が見える方へ歩いて行つた。

泉城の大きな門をくぐつた風遊子は、やはり目の前の喧騒に圧倒された。だがしばらくすると、その中から見知った顔がやって来る。ずいぶん大きくなり、体つきも頼もしくなつたけれど、顔だけは、変ることがない。

「おおい、雷遊子!!」

小さな人影が、くるつと振り返る。苦いその表情がとたんに輝いて、風遊子のもとへと駆け寄ってくる。その肩に飛びつくように腕をまわして、息が落ち着くのも待ち切れないように怒鳴つた。

9 第六回 闇に降る雪

「女の子!!」

突然のことに、風は目の前が白くなるのを感じた。

「おんなのこ?」

ようやく口にした言葉も、ただ間抜けに響くだけ。しかし相手は何度も真剣にうなずく。

「そう、女の子。ぼくくらいの背丈で、髪の毛が長くて、編んでる!」

目の前はまだ白い。

「おんなのこ……ん?」

わずかながら、白さがぬけてきた。頭のすみに何かがひっかかる。

「女の子——が、どうしたって?」

「いなくなっちゃった、どこにも!」

「それを先に言えよ!!」 風遊子の目の前から、白さがいつぺんに吹き飛んだ。雷遊子の腕を引つ掴むと、空いた手で軽く印を組み、気合と共にぼん、と飛び上がる。ふたりの姿はそのまま、空中へと溶けてゆく。

あとには、喧騒だけが残った。

六

「で、どの子だった?」

町外れにある、高い杉のてっぺん近くに、子供が二人。

「さっき言ったじゃないか。ぼくくらいの背丈で……」

「髪が長くて編んでる、か。んなモン、何人いるかわかるもんか!」

雷遊子は少し考えて、はっと思い当たった。

「あとは……そうだ、あつたかい光がでてたっけ」

「え、術師なのか、その子!?」

そう、普通の人間が、空に溶けたりするわけはない。彼らは術師であった……いや正確には術師見習と言つべきか。世に不偏的に存在する『光』をもとに、『空魔』というものから身を守るために術を振るう自衛集団『衝派』の術師。

だが、彼らは世の歴史に残ることがない。その存在を知る者は少なく、術師自体はさらに少ない…はずである。

雷遊子が首を振った。

「ちがうよ。彩ちゃんは普通の子だよ。」

……だけど、ほんとにあつたかいんだよ」

そついう旧友の顔を、風遊子は羨ましそうに眺めた。が、自分のその表情に気付くと、少し赤くなりながら咳払いする。

「そつか。でも、それならオレじゃなくて、雷の方が探せるんじゃないか？」

術師の多くは、人の中にある『光』…『内光』を感じる事ができる。雷遊子はこの能力が非常に強いのである。

「でも、こつ人が多くちゃ…」

うつむきがちになる雷遊子の頭を、風はぐい、と持ち上げた。

「つべこべ言わずに、やって見ろよ。だめなら別の手考えればいいし！」

雷遊子はちよつと口を尖らせたが、わかつたと一言いうと手を組み、目をつむった。その体勢のまま、身体を右へ、左へとゆっくり動かす。風遊子はそのたびに、落ちないように身体のかたむきを直してやる。そんなことがしばらく続いたのち、雷の目がぱつと開いた。

「あそこ！あの、倉みたいなところ!!!」

「よしきた！」

言いざま、風は雷の手を掴んだ。その場から、二人の姿が消える。

「あの中、だな」

倉の前。風遊子が確認する。雷はちよつと目をつむって、

「うん。間違いない。あそこの二階。奥の壁沿いにいる」

11 第六回 闇に降る雪

風はあきれた。相手の顔をまじまじと見て

「そこまで……わかった。じゃ、いこう」

と、相手に腕を絡ませて身構える。

雷遊子はいままでと違う方法に疑問を抱いたが、それはすぐに解けた。腕を掴んではいけないのだ。

風遊子はそのまま、ひょいと宙を見上げるようにして顔をあげ、目を閉ざす。なんどか首をひねるよう^{まぶた}にしていたが、ひとつ大きくうなずくと目蓋を開いた。

「ちようどいま、低い『風』が、あの部屋の真ん中を流れてる。じゃ、いくぞお……せえ、のッ！」

突然、周囲から『色』というものが消え去る。木々の緑も、空の蒼も、土の黄も。すべてがおなじように見える。ただ、形の違いからこれは木、これは土とわかるだけである。しかしその形すら、だんだんとぼやけてゆき、しまいには何もわからない混沌とした気配があるだけとなる。

絡んでいる腕の感觸、肩に食い込む笠の重み、舞上がる土のにおい。すべてがまざりあい、混沌として溶けてゆく。あとに残るのは、ただ気配。そして『光』。

『風』。世に流れ続ける『風光』の道。

そこに飛び込み、一体となつて移動する。これを行える人物を『風乗り』と呼ぶ。風遊子はその名の通り、『風乗り』としてはずば抜けた才能を持っていた。そもそも、術師見習いがこれほどつまく『風』に乗れること自体、異常なのである。

七

しばらくして、世界がまず形をなし、次第に色を取り戻していった——風から、出ようとしているのだ。しかし雷遊子はまだそれに気付かない。『風乗り』たる風遊子はその腕をぐい、と引つ張つて合図し、両手で印をきめはじめた。

風から出た二人を待っていたのは、女の子の叫びだった。

「待って！術使っちゃだめ!!」

彩花の声である。雷遊子と風遊子は思わず結果を張って…お互いの顔を指差して吹き出した。二人とも、相手の術を防ぐつもりだったのだ。

結果が解けてから、雷は彩花に近づいて言った。

「だいじょうぶ?」

少女はぶくつと頬を膨らませている。

「遅かったわね。ずっとここで待ってたのよ」

唖然とする二人。風遊子がたまらずつぶやいた。

「なんなんだ、こいつは?」

それを聞いた彩花がどなる。

「失礼ね！初めての場所なんだから、迷ったってしかたないじゃない!」

そう言う彼女の瞳は、安堵の色であふれていた。雷遊子はほっと胸を撫でおろしたが、つきあいのない風遊子の方はそうはいかない。

「かわいげのねえ奴！怖かったなら怖かったって言やぁいいじゃないか!!老師だって言ってたよ。怖さをなくしたら、生きていけないって」

じろつ、と視線の音がしそつなくらいの目つきで、少女が風を見据える。

「……雷ちゃん、誰、これ?」

雷はくくくつと笑って、答えようとしない。風が怒って言う

「助けに来た人間つかまえて、『これ』とはなんだよ、『これ』とは」

雷遊子はさらに大きく、けらけらと笑い続けている。

「雷!なんだこのへ、ちゃ、む、く、れは!!」

「雷ちゃん、なによこのちんち、くりん!」

雷遊子の笑いは、すでに息が苦しくなるほどになっていた。ときおり、げほげほと咳き込む音がする。

「雷ちゃん!!」

「雷遊子!!」

二人の声が同時に響いた。絶妙の間合いに、雷の

13 第六回 闇に降る雪

笑いが、さらに大きくなる。彩花も風遊子も、もはや口喧嘩くげんかをする気分ではなかった——あまりにも、ばかばかしくて。

結局のところ、雷遊子がまともに喋しゃべれるようになるまでに、二刻を要した。

「あらためて紹介するよ。こっちは、ぼくのむかしからの友達で、風くん…風遊子。この子は、もつちよつと西の方の町で知り合った彩花ちゃん」

「風遊子？ 雷ちゃんは雷遊子よね……兄弟なの？」

二人の顔を見比べている彩花に、風遊子が答えた。

「んにゃ、ちがうよ。雷もオレも捨て子だから……」

「雷の中で拾われたから雷遊子。風くんは風の強い日なんだよね」

「というわけだ」

「いいかげんねえ」

彩花はあきれ顔である。

風はそれにかまわず、最初に感じた疑問を口にした。

「しかし、なんで俺達が来るのわかってたんだ？」

「あんたが来るなんて思ってたわよ」

むつとして一歩前に出る風遊子を、雷が押さえる。

「でも、ぼくが来ることがなぜわかったの？」

「それは、易者さんが……」と、彩花が言いかけたとき、とんとんと階段を上がる音が聞こえてきた。三人が振り返る。

「あ、易者さん」

呼ばれた男は、三人の頭に手を置いた。

「よく来たね。雷遊子くん」

雷はその顔をまじまじと見つめた。どこかで見た覚えがある。だがそれがどこだったのか、まったくわからない。そのうちにはつと気付いて頭を下げた。

「彩ちゃんを助けてくれたんだよね。ありがとございます」

彩花が後ろで赤くなりながら頭を小突こぶく。易者はにやつと笑った。三人の顔を順に眺め、しつかりうなずくと

「あとで火を持って来てあげよう。今日はここで寝なさい」

そう言つて、彼は階下へと去つて行つた。

八

雷遊子と風遊子は、積もる話をひとつづつ片付けていた。いままでの旅のこと、旅で出会つた人のこと、などなど……二人が顔を輝かせ、また曇らせながら話しているのを、彩花は口も挟まず、じつと横で聞いていた。

(へんだな)相手の話がふと途切れたとき、雷はいつもと違つて静かすぎる少女をいぶかしげに見やつたと、そのとき、視界の中に見馴れないものが入る。

「あれ?」

話の腰を折られて、顔を上げる風遊子。だが相手はただ一点を見ている。窓の外。すでにつつす暗い空の下、何かが降つている。

彩花が窓へ駆け寄る。後ろから少年二人も、早足でやつて来た。

「あ…これ、雪?」

風遊子が、感慨深げに言う。隣でぶんぶんと首を縦に振る雷遊子。もともと、衝派術師たちの本拠地、緑宝寺には巨大な結界がかかつており、極端には暑くも寒くもならない。雪は彼ら…特に旅に出ていなかった風遊子には、話でしか聞いたことのないものなのである。

「ほんと。雪だね」振り向いた少女の微笑みからは、さきほどまでの緊張が感じられない。無邪気さを取り戻した彼女に、風遊子までも目をそらしたほどである。

だが、その雰囲気はすつと消えた。少女は窓にもたれ、外を見つめる。

「でも、ちょっとがっかりだな。夜だと…黒い中だと、白いものも黒くなつちやうのね…」

風遊子ははつとした。なにかが、心に引つ掛かる。

15 第六回 闇に降る雪

雷遊子は悲しそうな瞳でその背中を見つめていたが、軽く指を合わせると、今度は真剣な表情で指の隙間すきまを覗にらみつける。

やがて、指の間がぼつつと明るくなりはじめた。雷はそのまま窓に近づくと、彩花の脇から手を外へ伸ばした。

「せえ、のっ！」

掛け声と共に、手の中の明かりが輝きを増した。と同時に、あたりの景色が一変する。

「ね。ちよつと光があれば、雪はきれいに光るんだよ。闇の中だつて、雪は、黒くなんかないさ！」

少女は回りの景色をまぶしそうに眺めながら、うんうんと肯いた。その目のあたりが光っている。雷遊子はそれに気付いたが、なんとなく聞きづらくて黙っていた。後ろにいた風遊子もまた、その妙な雰囲気ふんいきに言葉を失っていた。

子供たちの後ろでは、いつの間にか上がって来たの

か、易者が火鉢の火を起こしていた。窓の方では、寒さなどお構いなしで雪に見とれる子供たち。その後ろ姿をじつと見つめ、微笑みながら彼はぼつりつぶやいた。

「そつか、ああいうところは師匠ゆずりなんだな……」

九

翌日。

雪は夜半でやみ、いまはもう城壁の隅ぐもに痕が残るばかり。

易者はいつもの通り、店を開いている。背後の家の二階から、ときおり子供たちの声がする他は、特に変ったこともない。平凡な一日。

……と、そこにいきなり声がかかった。

「おい『神足』！」

易者の心臓が、びくと跳ね上がった。がばと頭を上げると、見覚えのある顔が迫って来る。記憶の

中よりしわが増え、髪も白くなりつつはあるが…

「げ、鮑采……『裂山杖』の鮑采じゃないか!!」

浅くかぶった笠をとる。あつさりと束ねられた長い髪が、風に揺れた。

「久しぶりだねえ泉碓。もう何年ぶりだろう?」

「なんでお前がここに……と、待てよ。ひよっとして、緑宝寺か?」

うなずく鮑采。頭を掻き、

「うまく、乗せられた」と笑いながら粗末な椅子に腰をおろした。泉碓はやや険悪な表情になって

「緑宝寺にやって来たとは聞いてたが、雷遊子の捜索に加わるとはな。ずいぶん気に入られたもんだ」

だが、相手はそのような表情にもかまわない。

「あの子の師匠…妙漣どのがやられたとき、あの子の行方を見逃してしまった。お前さんはそれに責任を感じて、こんなところで待っていた…」

運命とは半ばほどいた綱のごとし、行く道は多けれど至るところは一つのみ——か。

さすがと言うか…ほんとにお前さんは、占師でも食っていけるな」

易者は帽子を少し深くかぶった。目線が見えない。「…わかった。お前の目的は、雷遊子探しだけだなら目的は同じだ。それ以上言うこともない」

その表情を探るように眺めながら、鮑采は感慨深げに言った。

「そうだなあ。たしかに、きみとやりあっていた頃は、まさかこうなるとは思ってもみなかったよ」

易者は一瞬驚いたような表情を見せると、すぐに真剣な顔になる。

「そうか? 私はそうでもないぞ。お前さんは衝派そのものに敵対するわけじゃなかった。流派の立場とやり方こそ違え、私と同じ、術師と世の中との橋渡しじゃないか。」

少なくとも私は敵だなんて思ってなかった……今も、だ」

「それにしても執拗だったな」そう言って鮑采はに

やつと笑った。左手に抱えていた笠をまた頭に乘せ、面倒くさそうな手つきでひもを結びながら、二階の窓へと視線を移す。

「さて、迎えに行くか」

「やめとけ」

突然のぶっきらぼつな言葉に、鮑采はちよつと戸惑った。

「よく見ろよ、あの顔を」

易者は後ろを振り向き、二階の窓へ向けて顎をしゃくった。そこでは子供たちが楽しそうに笑いあっている。

「あれだよ。あれがほんとなんだ。」

——考えてもみろ、とんでもない術持つてるからみんな忘れてるが、あの子はまだ十そこそこなんだぞ」

「…そうか。ずっと、大人しかいなかったのか」

泉碓は大きく首を振る。

「ああ。あの子の回りには、大人しかいなかった。少なくとも、同じくらい歳の子供なんかいやしな

かったんだ。妙連も、そういうところは抜けてるんだよなあ」

ため息まじりの泉碓の言葉を噛みしめながら、鮑采はじつと窓を見つめていた。そして、ふつと表情をやわらげる。

「あの子らだけでも、盤印を届けることはできる、か。緑宝寺どのには悪いが…たしかに引き上げた方がよいかもしれん」

「ここではじめて、泉碓はほつとした表情になった。鮑采は黙って目だけで応える。…誰が見ているわけでもないのに、言葉ですべてを伝え合えないのは、役目を背負っていた者たちの証しなのかもしれない。

「うん、頼むよ。あとは私が見てるって、言つてくれ」

「ついて行くかい？」

易者の頭が大きく振られた。はずみで帽子が前に落ちる。が、彼はそれに一瞥もくねず、目の前の旧

友の目を見据えていた。

「わかった。風くんには、適当にごまかしといておくれ」

そのまま歩み去って行く後ろ姿を眺める易者の耳に、馬の蹄ひづめの音が聞こえて来た。

十

こちらは二階の子供たち。

彩花までまじって旅の話を膨らませていると、なにやら外が騒がしい。雷遊子がばたばたと窓に近づき、下をのぞく。

そこでは、官吏の服を来た若い男が数人、易者を取り囲んでいた。よく聞くと、

『怪しげな術によって民を惑わす不届き者！』だの『易者など、町の邪魔者だ！』だのといった罵声が聞こえて来る。だが、易者は答える風でもなく、むしろ呆れているように見える。

『昨日町中で消えた子供が、この家にいるそうじゃないか。人さらいをするような奴を、この町においておけるか!!』

この言葉に、雷と風は愕然となった。

「しまった！オレが人前で術使ったから…」

県城けんじょうに来る前、鮑采に受けた注意が頭を駆け回る。

「しかたないよ。とにかく、易者さんを助けなきゃ」

言い合っている間に、窓の外からは馬のいななき。はっとした二人が窓から首を突き出すと、すでに官吏も易者もおらず、残ったのは遠ざかる蹄の音だけだった…

十一

縛られると同時に目隠しをされていた。馬から降ろされると、しばらくの間右だ左だと歩かされ、その度に人の声が少なくなっていく。やがて、足元の感覚が土から木に変わり、終しまいに泉確いずみは、とある部

屋に放りこまれた。

目隠しをはずされて見えるそこは、小さな部屋に鋼の戸をつけただけの簡単な牢屋。ただ一つ、普通と違うところは、四隅に置かれた石の柱。部屋を支えるわけがなく、さりとて飾りとしては奇妙。もっとも、術師ならば馴染みのもの。その目的も、また明らか。

「泉碓。もう逃げられんぞ」

泉碓は思わず大きくため息をついた。相手が誰かは声でわかる。そして、相手がわかれば、なぜこうなったのかもすべてわかる。

「そうか、お前がこの泉尉だったか、沼碓」

白い地に銀を貼りつけた、いかにも高官といった服装だが、中身はその衣に隠れるくらいに小さな男。男は狐を思わせる狂気じみた笑みをその顔に浮かべ、泉碓の前へぐいと顔を近づけると、ささやくように言った。

「いまの俺は、泉尉の劉鵬白だ。…このまわりの石

柱を見たか？」

易者は辺りに視線を投げかけ、ふん、と鼻を一つ鳴らすと、

「これが、なんだ」

「大きいだろう。緑宝寺にもない封呪石だ！」

そして奇妙に高い笑い声。泉碓はそれをつんざりしたような顔で聞き流すと、言った。

「それは知っている。私が言ったのは、『封呪石がどうかしたのか』ということだ」

封呪石とは文字通り術を封じる石。微妙な調整を受けた異なる結界を三つ以上の石に封じ、その組み合わせによって、その中の術の成立を防ぐものである。強力な術を試すときによく使われる。もちろん、衝派術師の泉碓が知らないはずはない。

「ほ、ほ！『神足』も墮ちたな。身に起きていることが理解できんとは」

そして再び高笑い。笑いながら、体が汗を帯びてくる。

（汚いな）泉碓は思わず考えた。汗がではない、目の前の相手が、である。しかし自分もまた、こうなる日が来ないとも限らない…そう思うと、目をそらすわけにもいかない。

そのかわり、彼はより残忍な方法で応じることにした。

「ほう、』身に起きていること』か…」

念のために聞いておくが、まさかお前、私のあだ名を忘れたわけじゃあるまいな？」

男の肩が、ぴくつと跳ね上がった。肩はひと呼吸の後、ことさらにゆっくりと降ろされてゆく。背後をうかがいながらのその動作は、内心の動揺を如実にあらわしていた。

「『神足』の方ではないぞ」

口先だけの笑い顔から、言葉が冷たくこぼれ落ちる。男は背を向けたまま、全身が震えはじめていた。

やがて、耐えきれないように振り向く。その目の前には、静かにたたずむ泉碓の顔。鎖入りの頑丈な

縄を、指先でもてあそびながら…

「き、きさま!?!」

それ以上は言葉にならない。陸にあがった魚のように、ただ口をぱくぱく開け閉めするばかり。泉碓はそれを見て再び大きくため息をつく。

「やはり忘れていたか」

言いながら震える相手の肩を脇へ押しやって、目の前の扉を開けようとする。

「『術師なればこそ、術に頼るな』だ。…老師の仰（おん）しゃったことが、まだわかっていないようだな。

ま、安心しろ。別にお前の地位を脅（おびや）かす気はない。術を使って、得た地位でなければ、立派なものだ。それに、術師として生きる必要がなくなったのは、良いことだしな。

あの子らが来たのも偶然だ。それでもちよつかいをかけるつもりなら…私はいつでも、昔に戻ってくられるぞ。覚えておけよ」

泉碓が去った後も、鵬白の身体からは震えが消えなかつた。全身からは暑くもないのに汗が吹き出し、服が重くなつてゆく。かっと見開いた目は、あてなく虚空をさまよひ、大きく開かれた口からは涎が一筋、床へと垂れて行く。

『『衝派の…死神』……だめだ、このままじゃ俺が、俺の身が……!』

その瞬間、瞳孔がぎゅつと締まった。

「そ、そうだ、たしかあの子供は、あいつが探していたはずだ。あいつを呼べば……」

けたたましい笑い声が部屋中にこだまする。それは、すでに人のものではなかつた……

十二

泉碓が臈尉の家から帰ろうとしているちょうどその頃、子供たち三人は、なんとか彼を助けようと、家を飛び出したところだつた。

仕込み笠を片手に緊張した面持ちの雷遊子。いつでも逃げられるよう、空手になつた風遊子。そして、手近にあつた刃物を二、三本懐に隠した彩花。

術師見習たちの師匠が見たら、怒り出しそうなほどの無鉄砲さである。もちろん、本人たちは真剣なのだが。

…しかし、それが甘い考えであることは、すぐにはつきりした。

城郭の脇、人気がない道を歩く子供たちの前で、何やら妙な気配がする。その異様さに気付いた雷遊子が二人を制し、反射的に結界の型を作る。

結果的には、その無意識の反応が彼らを救つた。

ヒシッ

空を裂く鋭い音が、あたりに響きわたる。同時に雷遊子は、跳ね飛ばされそうになるほどの強い衝撃を感じた。子供たちを半球状につつんだ結界に、何

かが当たったのである。

地面には一文字に亀裂が生じている。結界の部分を除いて、前と後ろ。

「あそこ、誰がいる!!」

悲鳴に近い彩花の聲が飛ぶ。指の先には、木と間違えるようなこげ茶の衣を着た男が、無表情で立っている。

その隣には、雷には見覚えのある、黒衣の男。

「みんな、離れて! 狙われているの、僕だ!!」

再び、ピシツという鋭い音。雷遊子はもう、口を開くことさえままならなくなった。

「結界の中で、どうやって離れろってんだよ!」

言いながら、風遊子が二人の腕を探る。逃れる手段は、『風』しかない。彼はそう思った。

二度目の鋭い音。顔にまで疲れが見える雷遊子。彩花が泣き叫ぶ。その二人の腕を無理に掴んで、風光を感じる。そのときだった。

「な……なん、だ!?!」

思わず目を見開く風遊子。身体の中を流れる、異様な感覚。寒気さむけとも熱とも違う。ざらりとした無気味な感覚。

(なにこれ!?! からだが…からだがあ!?!)

彩花を襲ったのは恐ろしい熱。だが、しばらくするとその中に凍るような冷たさを覚える。心の奥底にある、恐怖を呼び起こされる。叫びたい。泣き叫んでそれを消したい。けれど、喉からはただ息がもれるだけ。

「だめだ…暑くて『光』が回ってくれない! 結界がとけちゃう!!」

雷遊子の胸。ちょうど盤印があるところが、光り輝いていた。熱が彼の身体を駆け巡り、そのまま自分の力を奪い去ってしまうように思える。そして実際、結界を張る力が失われていった。

薄くなった『殻』かくの結界めがけて、目にみえるほどの『光』の奔流ほんりゅうが押し寄せる。

「とける…たすけて…老師、李姐りねえ、岳生さんがくしやう…みんな

なを、たすけて!!」

雷遊子が泣きながら叫んだ、と同時に結界が消える。抑えられていた光が、子供たちへとなだれ込んだ。黒衣の男がなにやら慌てているが、もはや止められない。

やむなく、その最期を見届けようとした男は、次の瞬間、戦慄した。押し寄せていた『光』が霧散しはじめたのだ!

その『光』がすべて消えても、戦慄はおさまらなかつた。

『なにか』が来る。

子供たちの放つた『なにか』が近付いてくる。目には見えない。それ自体は感じない。ただ、回りには消えずの『光』が消えてゆく感覚からそれがわかる。

男二人は動けなかつた。臆病呼ばわりは当たらない。『光』とは世に普遍的にあるもの。術によつて集め、また避けることはできても、なくなることはない。…それが、術師の常識なのだから。

結界を張る。術を放つ。僅かな時間で試せる限り。のことはやつてみた。何も効かない。『風』…『風光』すら喰らいつくすその前では、すでに逃げることはさえかなわなかつた。

ここまでか。そう観念した男の視界に、子供たちの姿が飛び込んで来た。

(よく私を倒せたものだ) 敵ながら、誉めてやりたい気分である。最期にその顔を見ておこう、と目をこらす。…おかし。三人いるはずなのに、一人いない。いや、一人いるはずの場所が、何も見えない。「そんな、まさか…!!」

それが、黒衣の最期の言葉となつた。

十三

「なんだと、黒宝こくほうが!？」

薄暗い部屋の中、薄布の帳とばりの奥で、大きな椅子が音を立てて倒れた。布に映る影が揺れているのは、明

かりの揺らめきのせいばかりではあるまい。

「は、私も信じられませんが、たしかに彼の『光』が消えました」

黒い革の鎧を着た男が、無表情な声で言う。その声からするとまだ若そうだが、黒い革で覆われた顔から、年齢は伺えない。

影の手が、またゆらゆらと揺れる。

「ふむ…やはり先程の莫気か。しかし、妙漣もあらぬのに、どうやって…」

帳の前で、男は一步前へ進んだ。

「考えますに、あの子供ではないかと」

帳が、静かに開かれた。背後の明かりに照らされ、まるで自身が影になったかのような存在が、段を一つ、また一つと降りて来る。

「妙漣の弟子…雷遊子とか言ったか？ たしかに、あり得るとすれば、それが…万々が一が当たってしまっただのか。」

だとすると、妙漣にかかわっておる暇なぞないな

「お出になられますか？」

すでに目の前にまで降りて来た相手の目を見ながら、男が尋ねた。その目には、明らかに疑念の色がある。自分の力に絶対の自信を持つ者に特徴的な光である。

「よかろう。では黒玉、すぐに奴らをつけよ。そして、子供を連れて来るのだ。」

…殺さなければ、どのようにしてもよいぞ」

黒革の男は、黙って会釈し、その場を離れた。

十四

その夜。県尉の屋敷は静かだった。……ときおり大きな音がする以外は。

「なんだ、あいつらは!?!」

県尉の振り回した腕が大きな壺にあたる。がつ、と大きく鈍い音を残してそれが割れた。だが、男は気

にする様子もない。

「全然役にたたないじゃないか!! ああ、こうしている間に奴は、奴は!!」

もう誰も近づこうとしない。すでに狂っているのかもしれない。

「そ、そつだ。兵を、兵を呼ぼう。皇帝に逆らい、怪しげな術で民を惑わす者! これなら、兵を出してもらせる…」

そのとき、彼は背後に立つ者に気がつかなかった。

「ちゃんと警告したつもりなんだがな…残念だ」

そして翌日、鵬白県尉の遺体が発見された。首に刃物によるだろうきれいな…あまりにもきれいな傷が一筋あるだけで、身体には争ったあと一つなかったと言つ。彼が倒れたあたりで、強い光を見たと言つ者もあり、また狂ったような笑い声を聞いたと言つ者もあり、人々はいろいろと噂を立てた拳げ句、不

思議な事件として忘れ去られていった。

その翌日に旅立った三人の子供と、一人の易者のことを思い浮かべる者は、結局一人もいなかった。

十五

泉城での騒ぎがうそのような、蒼い空。三人の子供たちは、再び雷遊子に付き合つて、旅をはじめていた。

「そつか、鮑采さんは緑宝寺に戻つたんだ」

雷遊子が残念そうに言つ。

「水臭いよなあ。易者さんにこ、とづてして帰っちゃうなんてさ」

風遊子が心える。

そのちよつと後ろ。彩花だけが、ひとり遅れてうつむきながら歩いている。

「どうしたの?」

その顔を覗きこむ雷遊子。

「きゃ!!」突然の大きな顔にびっくりした彩花は、咄嗟に思い切り、平手を食らわした。道の脇の草むらへ、頭から突っ込む。

しばし茫然としていた少女は、はっと我にかえって駆け出した。

「ごめん! 痛かった?」

雷遊子は頬を押さえながら、それでも笑顔で立ち上がる。

「だいじょぶだよ、彩ちゃん。そんなに考えないで。

また怖い目にあつたら、ぼくらでなんとかするから」

その顔を横目で見ながら、風遊子。

「その前に、お前に殺されなきゃ、な」

「なんですってえ!!」

彩花が激昂した。腕を大きく振り回しながら風の右頬を狙う。風遊子はその腕を左右にかわしながら走り去る。頬を押さえながら雷遊子がその後を追う。

…旅はなかなか始まってくれなかった。

子供たちから少し離れた、丘の上。男が一人、その様子をうかがっている。やがて、何事もなく北へと向かう彼らの後ろ姿を見て、すっと起き上がった。懐から地図を広げ、次の隠れ場所を探す。

「…ま、いまの私にはこれが一番似合っているか」

番外一 いのちの綱

むかしのはなしである

いまで言う中国の西の方。さほど人もなく、ざりと閑散かんさんともしてない、ごくごく普通の村の脇に、小さな森がある。

近くには小さいながらも川が流れ、魚や鳥の住処すまがとなつてはいるが、なぜか人影はない。

村の人々は昔から、この森を『門森もんじん』と呼んで密かに恐れていた。用もないのに森に入ると、その門から外へ飛ばされてしまふと言つのである。

いま、その門から一人の若者が出て来た。若者は、場所を確かめるかのように首を左右に振ると、村の方へと歩いて行った。

古びた家の軒先のきさきに、『茶』と書かれた小旗がぶる下がっている。なれた調子でそこへ入った若者は、開口かひこう一番、

「おいちゃん、いつもだね」

呼び掛けられた老人はくるりと後ろを向くと、箱の中から袋を取り出して、若者の前に差し出した。

「あいよ…しかしよく買うねえ。三日とあけずじゃないかい」

煤すすけた着物と対照的な、よく光る頭の老人。その顔は、ちよつとだけ困惑こんわくしたように見える。

「はは…まあ、よく飲む連中がそろつてるから」

笑いながら若者が言つ。年はまだ二十前だろうが、剣でも持たせたら似合いそうな引き締まった体つきは、寒さのために羽織はおっている毛皮を通してもよくわかる。

「まあ、飲んでうまいと思つうちが花だねえ。こつちは夏の照りが強かったせい、川の水が少なくなつ

たよ」

「そつか。それじゃ茶なんか飲めないね」

受け取った包みの回りを手でもてあそびながら、若者は考え込むような顔つきになった。真剣な顔と、子供っぽい手の動きが奇妙に映る。

「ははは。もともとわしらは茶は飲まないよ。あんたが買ってくれないと困っちゃうくらいだ…と、そんなこと言ったら、値切られちゃうかね」

そう言つて老人は笑つた。そもそも相手が値切るなど考えてもいない。

「大丈夫。おいちゃんとは、安くてうまいからみんな喜んでよ」

「そつかい、そりゃ嬉しいね。…ほい、おまけだ」

「あ、悪いね。じゃ、代はここに置いてくよ」

鑄物の銭を皿の上にちやりちやり、と置くと、若者は去つて行つた。

老人は数えもせず銭を懐に入れてると、皿をひよ

い、とひつくり返す。そこには、おまけしたはずの茶の代金が、一銭と違わずに置かれていた。

それを一枚、また一枚と拾い上げながら、老人は思はずつぶやいた。

「はあ。若いのに相当な頑固者だな、あの男は」

二

村を出て『門森』へ向かつた若者は、その一刻後には数百里ほど西の森にいた。

大きな森の西外れ、高い木々が、そこだけ抜き取つたかのようになくなつてゐる。あたりの丈の短い草は、まるでまあるい布団のよう。

そこに突然、彼は現れた。一瞬前には、何もなかつたところだ。

彼はぐいつと大きく伸びをすると、まわりを見回した。

見渡す限りの深い森。その一方だけに道が伸びて

いる。彼はその道に沿って歩きはじめた。森の中心に向かつて。

道はまっすぐに伸びている。脇にはただ森があるばかり。だが、普通の森とは違う。鳥の鳴く声、虫の声。森特有の音、というものがない。ただ静けさだけが、耳に痛いほどしみてくる。

半刻ほど歩くと、正面に小さな門が見えた。門の上には『脱虎』の二文字。それを配した扁額が、二頭の虎の彫り物に背負われるようにかかっている。

彫刻は元は白虎のもりだったのだろう。白い塗りの物のあとが、その頭の部分にかすかに残っている。

「宗珀、入るよ」

若者はその虎に向かつて声をかけ、そのまま中へ入って行く。この門……『脱虎門』だからこれでも入れるが、森の東にある『招童門』ではこつはいかない。門を歩いてくぐっても、まだしはらく森が続く。門の手前と違うのは、森がいきいき見えること。

虫の鳴く声、鳥の声、草木の萌える命の声。

若者の顔が、ふと緩んだ。

暖かい緑の海に、小島のように建物がいくつも浮かんでいる。

彼はこの風景が好きだった。あたりの雰囲気を作り出しているものすべてが、自分たちの現実を忘れさせてくれる。

この森から一步外へ踏み出せば、そこは不毛の地なのだ……

彼らは衝派源流の術師である。

『光』と呼ばれるいのちそのものの力を基に、様々な『術』を編み出し、この世に害を為す宿敵『空王魔』を倒すため、日々修行に励む者たち——とでも言えば格好もつくのだが、実際には空魔の気に敏感すぎ、耐えられなくなった者たちが、寄り集まって身を護っているだけの自衛の集団にすぎない。

数百年前、術師たちは岩と砂しか見えないこの地に、強大な術をもって森を作り出した。

岩と小石の不毛の大地、そこに輝く緑の宝。

名は、緑宝寺と言う――

三

緑宝寺の朝は早い。

役目のある者の他は昼まで寝ていても咎められることはないのだが、早起が多い。

殊に早いのは、寺の中央やや南側にある、練光所すなわち術の訓練場。

別に義務付けられているわけではないが、それなりの術を持てば磨きたくなるのが人情と言つもの。このため、日によっては夜の明ける遥か前から人の気配がする。

そして、練光所から戻ってくる者たちの腹を満た

す厨房も早い。

本来、厨房の厨師は、主に女坊の女たちが当たっている。とはいえ、勝手に訓練している者たちのために、早朝から彼女たちを起こしておくわけにもいかない。このときに限り、術師たちが自主的に交代で調理や片付けを行っている。

余談になるが、料理の後片付けに手を焼いた結果、ついに皿洗いの術を編み出した者がいる、というのには有名な伝説である。

…もつともこの術、現在までは伝わらなかったよのだが。

ここまで極端ではないにせよ、早起はまだいる。朝露が抜け切らないうちに仕事をしなければならぬ者たちである。

緑宝寺北西部、みな陰で『狂草畑』とあだ名している小さな草畑。とはいえ、別に危険な草を育てて

いる訳ではない。危険なのはむしろ、そこに出入りする者たちの方である。

「薬草が足りんなア」

草むらにしゃがみ込みながら、男が言った。年は四十に手が届くかどうか。濃い緑の袴はあたりの草に溶け込むよう。同じ色の布を首や手に巻き付けているので、よけいにその感が強い。

横で若い男が立ち上がった。そっくり返るほど大きく伸びをして、それでも足りずに「二、三度腰を叩いている。顔にはまだにきびが残り、細いがしつかりした体つき。」

「おやじさん、惚けたんスか？薬なら以前に決めたとおり、ちゃんと三日分あるじゃないスか」

歳とつた方の男はじろり、と睨みつけて、

「慶治、お前え俺達の役目舐めてんじやないだらうな？三日でなんもかんも片付くと思つたら大間違いだぞ」

この男、名前を寂という。蒼竜医呪と呼ばれる、

怪我や病気を治療する術を得意とする集団の長であり、緑宝寺内の医療関係すべてを取り仕切っている人物である。

とはいえ、緑宝寺内での彼の評価は、ただ一言「薬草気違い」であった。

「そら、そうスけど…」

寂はそれ以上言わず、脇から何か取り出すと、慶治の前に差し出した。片腕でやっと抱えられるほどの桶一つ。

「わあつてんならごちゃごちゃ言つな。ほれ、こいつに一杯、薬草摘んでこい」

「へーい」

あくびを含んだ若い声が、朝靄に響いた。

二刻後。桶いっぱい薬草を前に、寂はにたたと笑っていた。いくつか草を取り出しては、裏表を舐めるように眺めている。

とても四十近い男のやることには見えないが、慶治は「と言つより医呪者たちは―注意や説得のたぐいを、もう何年も前にあきらめていた。

さて、慶治は取つ手のついた小さな鍋なべで何やら煮ているようだ。

くつくつと鍋の中から聞こえる音にじつと耳を傾け、鍋を上げ下げしながら火加減ひかげんをとっている。

ほどなく、やわらかい香りが漂たなよってきた。

「おやじさん、できたスよ」

寂はちよつと残念そつな顔を見せたが、手に持っていた草を手早く小箱に分けて納めると、大きく腰を伸ばしながら慶治の方へやってきた。

「どうスか、この粥かゆ」

寂は鍋の中をじつと眺めていたが、指を一本突っ込んで、味見をする。その顔が苦々にくにくしく曲がった。

「…だあめた。薬ちからの効果落ちちまつてら。

いいか慶治、俺たちや怪我や病氣治すんが役目だ。この粥はたしかにうめえが、薬にならにや意味がねえ

んだよ」

目は真剣だが、箸はしが勝手に粥の中の薬草をさらっている。

「うーん、薬かア…」

困りきつた顔を見て、寂は心の中でうなずいた。こいつも、あとちよつとなんだがなあ…そう考えながら、まだ箸は止まらない。

「まあ、うまいにやうまいんだ。食つてからまた考えろや」

人心地ひとしこぢつくつと、寂はすつ、と立ち上がった。そのまま畑の奥、森の近くへ向けて歩きだす。

慶治は慌あわてて近くの風呂敷ふろしきに皿やら鍋やらを放り込み、乱暴に包むと背中に背負しよつてその後を追った。

鬱蒼うつそうとした緑のそばに、なぜか皮膚ちほだの見えるところがある。二人はここで立ち止まった。寂が目配めくばせする。

「じゃ、はじめるか…言つとくが、今日でまる半年

だぞ」

そう言いつつ、懐ふとんからなにかの種をひとつまみ取り出すと、目の前にわっつ、とばらまいた。

慶治は困ったように頬ほを掻かき、

「わあつてますよ。そうそう目覚まし鐘がわりになるもんですかイ

さあてと、そんじゃ一発……」

言いながら、禿はげた大地に向かって型を決める。目はざらりと輝き、目の前の土をねめつける。そしてそのまま、体をすつ、と落とすと、型を決めたままの手のひらを地面に押しつけた。

と、地面に時まかれた種が一斉にはじけた。埃ほこりのよつな根が、養え分さを求めて地へ潜ろうともがき、薄く蒼あい芽めがちよこつと顔をのぞかせる。

青年の顔が、子供のよう輝いた。思わず顔を上げ、寂さびの方かたをみやる。

「あ、待まちて……」

咄とつ嗟さにもれた男の言葉が、慶治に聞こえたかどうか

かはわからない。

四

ズンッ！

静かな森の中に、重い響きが伝わって行く。

寺の中央、中堂と呼ばれる建物の奥で、ふとんがゆつくりと持ち上がった。

「あはあ……もう、朝か」

響きの余韻よゐんが、まだ首の辺りに残っている。それを振り払うようにして、彼は起き上がった。

たらいに張つてある水で顔を洗い、絞つたふきんで寝汗をぬぐうと、いつもの服に着替える。

薄い緑の袴あひせにやはり薄い赤の帯。全体としてゆったりした……ある種しだらしない格好である。が、しかし足だけは、幅の狭い木綿の布でしっかりとこしらえている。

帯の背中に短剣一つ。柄の部分は鳥の動体のように飾られて、しかもつばと鞞の間は茶色のひもで固く結わえてある。

彼はおよそ実用的とは言えないこの剣の具合を確かめるかのように、何度か帯を結びなおすと、上から緑色をした薄手の羽織をはおった。

年の頃なら二十歳前後。慶治と大差のない年齢だが、歳に似合わない落ち着きがある。もつとも、これは役目柄、しかたのないことではあるが。

部屋の隅にある棚にすい、と近寄る。抽斗から筆と墨壺を取り出すと、壁にかかった数枚の板の中から「慶治」とあるのを選びだし、脇に書いてある数字に斜めの線を引いた。

この板をじつと見ながら、

「もう半年か…寂さんも大変だなあ」

とため息まじりにつぶやいて、しばらくぼおっと考えこんでいたが、腹が鳴ったので食堂へと向かった。

食堂へ向かう途中、女坊の脇を通った彼に声がかかる。

「あ、おはようございます、緑宝寺さま」

そう、彼はこの緑宝寺の長である。名前は空諾。術師の名前である『呪名』は三文字が普通で、一番上の文字は師の名前から取られる。これを師名と言つ。しかし、役目を負った者の場合、役名は師名の代わりと考えられている。

空諾の役名は『緑宝寺』である。『緑宝寺』の長の『緑宝寺』なのである。なんともややこしいが、伝統であるし、本人がこの名前を気に入っているので、何の問題もない。

「おや、お早いですね梨環さん」

振り返って、空諾が応える。相手はにこ、と笑った。あちこちに赤い房のついた白い袷に身を包んだ女性。しかし緑宝寺同様、足だけは動きやすくしてある。その服装に短めに切りそろえた髪、背の低さもあいまって、一見すると少女のように見える。し

かし――

年齢は恐くて誰も訊けないが、三十五を過ぎていくことは間違いない。術師でもないのに、この化け方は驚異的であった。

「お食事でしたら、だれかに運ばせますのに……」

緑宝寺は声を出して笑った。

「はは、とんでもない。そんなことに彼女ら使っちゃいけませんよ。毎度言いますけど、女坊は術師のためにあるわけじゃないんですから」

それを聞いて梨環は困ったような、恥ずかしそうな表情になって、軽く頭を下げた。

彼女は、女坊の長なのである。女坊というのは空諾の言つとおり、術師とは直接関係はない。

十数代前の緑宝寺の時代、世の中で大規模な戦^{いくさ}が起こっていたとき、その犠牲になり、行くところのなくなつた女子供を寺の中に避難させたのが、この女坊の始まりである。

彼女達は、家賃代りに寺のさまざまなことを手伝

い、あてができれば、世の中へ戻つて行く。…もつとも、そのときには、術師たちのことを忘れるような術をかけられるのだが。

「あ、そうそう、忘れるところでした。…申しわけないのですが、またお茶を買つて下さいませんか？」

梨環は手をひとつぽん、と叩くとそう言った。空諾はやや首を傾^かげて、

「あれ？お茶なら二日前、宗^{そう}珀^{はく}に買いに行つてもらつたばかりですが、もうなくなつたんですか」

女坊の長は口をへの字に曲げた。

「ええ。実は…あの、朝だけの厨^{ちゅう}師^しの方々が、火種^{ひだぬ}と間違えて燃してしまつたらしいですよ」

緑宝寺はおもわず頭を抱えた。

しかし、考えてみると無理もない。自分で茶を煎^いれる空諾や女坊の女性たちはともかく、ほとんどの術師たちには茶の葉など縁遠いもの。まして、彼らの出身地の多くは北の地、茶を飲む習慣のないところなのである。

「わかりました。みんなには後で注意するとして、今日また宗珀をあの子に出しますよ」

梨環は深々と頭を下げて、そのまま立ち去ることにする。その後ろ姿に、空諾が声をかけた。

「あ、梨環さん…できたら、あの娘にも行くように、それとなく言ってもらえませんか？」

振り返った梨環は、やれやれといった表情で、

「ええ、私ももう帰ってもいいと思いますけど…私ではできれば、あの娘の方から『帰りたい』って言うて欲しいですわ」

いままでとは違う、有無を言わさない口調。緑宝寺は苦笑しながら少しうつむいて、頭を掻いた。

「そうですか…すみませんね。いまの話は、聞かなかったことにして下さい」

梨環はそれを聞くとにこ、と少女のように微笑んで、今度こそその場を去った。

歩きながら、考えがひとりでに口に出る。

「術師たちを見守るのでさえ大変でしょうに、女坊

のことまで気にしているなんて…

あの方が緑宝寺でよかったわ。本当に」

五

昼過ぎ、中堂から宗珀が出て来た。手には麻布のさいふを持ち、当惑したような表情で、脱虎門の方へ歩いて行く。その背中に声がかかった。

「あ、宗珀さん」

振り返ると、娘がひとり立っていた。

薄い緋色の一枚布を頭からすっぽりかぶり、腰紐で結んだ西国の着物。茶がかった髪は長いけれど、まっすぐ垂らしても腰に届かない。それもそのはずで、背丈は宗珀にも負けないくらいある。

「なんだ、芳ちゃんか」

芳里、というのがこの娘の名前である。

二年ほど前、宗珀が初めて茶の買い出しに門森のある村まで行ったとき、一緒に緑宝寺までついて来

てしまつた娘。その後、事情を聞いた女坊の長が緑宝寺に相談して、女坊に置くことになつた。

「『ちゃん』はよしてください。…ええと、またあのお勤めですか？」

口を尖らせた娘を、宗珀は笑つて見つめた。

「ん？ああ、そうだね。わかつてるよ、なにか持つていけて言つのかい」

「ええ、このお花……」

芳里は懐から、李の花を一輪、取り出した。

いま世の中は冬だが、緑宝寺の中では、その気になれば梅だろつが梨だろつが、何でも咲かせることが出来る。もちろん、植えればぼん、と咲くわけはない。丹念たんねんに世話してやるが大前提である。「あのおいちゃんにはもつたいたない花だな。ま、いや。じゃいつものように活けておくよ」

本当は、きみが行つた方がいいんだろつけどな」

「しかたないわ。あたしは……」

そう言つてうつむく芳の頬に、宗珀の手がそつと

触れた。その部分がさつと紅あかく変わる。

と、いきなりその手に力が加わつた。

にゅつ、といつ音とともに顔が變形する。

芳は両手を振り上げた。

「なにするのよ！」

膨ふくれたその顔に向かつて指をさし、笑いながら、宗珀は森へ去つて行つた。

その後ろ姿を見ながら芳がつぶやく。

「ごめんね。ありがと、宗くん」

六

宗珀が緑宝寺を出て十数刻、日も西に傾きつつある時分しぶん。中堂の奥、緑宝寺の私室には、主あその他にも一人いた。

「最近、源流以外の者が増えているようですが」

椅子に腰掛けているとはいえ、微動びどうだにしないその姿が、性格をよく物語っている。

体格はいいとは言えないが、さりとて細すぎもしいない。身体にびったりと張り付くような服装。首の辺りまで伸ばし、首元で固くしばった髪。どれをとっても、なによりも動きやすさを考えた格好である。

名前は朱崩しゅほう。つい最近、十八になったばかり。術師としての能力は誰もが認めるところではあるが、悪い意味で若い、というのが大方おおがたの評価である。

彼は、緑宝寺を睨にらむような目で見据みすえながら話していた。

「うん。近々、武術の指導をして下さる方もお呼びするつもりだよ」

空諾の方は、平然とその目を見返している。…が、実のところ、内心はそう平静でもない。

「ぶ、武術の師!？」

朱崩の身体がようやく動いた。緑宝寺はただこくり、と背せく。

「聆た譜ふさんという方なただけだね。泉い碓づや岳たけ生せいさんと付き合いがあるらしいから、術師のことをある程

度知さっているし、皇帝陛下みかどからの再三さんさんの招ま併へいに疲つかれているとも聞きいているよ。だから気の合あいそうな人を出せば、来てくれるんじゃないかと思うんだ」

今度、朱崩の身体は動かなかったが、顔色は明らかに変わっていた。

「武術…術師にそのようなものが必要だとは思えません。まあ、やりたい者がやるのは勝手ですが…」

「いや、そんなことはないよ」

空諾は、長くなりそうな朱崩の言葉を、無理矢理に断ち切った。

「だいたい『武形呪ぶけいじゆ』なんかは、武術を身につけていないとできないだろう?。」

朱崩の顔が紅潮こうしゅうした。

「あれは粗野そやな剛流こうりゅうの術です。源流と一緒にしないで下さい!!」

『武形呪』というのは、武術の型を途中で止め、その後の動作を『光』によって成なし遂とげるものである。

武術と術の素養そようがあれば、比較的簡単に、強烈な効果が得られる。

源流ではさほど盛んとは言えないが、朱崩の言うとおり、同じ衝派でもすでに滅んだと言われる剛流きよくゆうや極流きよくゆうで、多く使われていた。

「剛流だって、術流派であることに変わりはないよ。そもそも衝派の術は、古代衝派の時代から周囲のよい術、よい考えを吸収しながら発展させていったものだよ。」

もちろん源流の術に優れている点は多くあるけど、それは後からできたから、先人の流派のよいところを集めたから、という部分が大きいと思うよ。それなら、今後もよいところを取り入れて行けばいいさ。剛流のよいところは吸い尽くした、なんて奢おぼっちゃいけないよ。」

だんつ、と大きな音が部屋中に響く。朱崩が机を拳こぶしで叩いたのだ。

「それは違います！源流はたしかに他流を見ていたかもしれませんが、決して取り入れたわけではありません。ただ、他流を見ることによって、源流の本質を突き詰めて行っただけです。」

それが『粹流すいりゅう』というものです!!」
緑宝寺は頭が痛かった。

「術師は他流派と交わらず、より純粹である方が強い」と主張する、いわゆる『粹流説』の信奉者であった師を半年ほど前に亡くし、その後継者たらんとしている彼の気持ちはわからなくもない。

だが、こうまでなると……

「そもそも今回のような混乱を招いたもとは、まず他流の者を総師範そうしはんと仰おぼいだことに始まります。そのため、われらは貴重な術師たちを失い、先の空魔との戦いに大敗するに至り……」

『総師範』のくだりで、空諾の眉がぴくりと動いたが、朱崩はそれに気付かなかった。

緑宝寺は流れるような相手の口調を今度は手で制

すと、口を挟む。

「気持ちにはわからなくてもないけどね、朱崩。

それでいくと、私が緑宝寺でいるのもおかしくはないかい？」

空諾は先の緑宝寺、影焼えいしょうに拾われ、わずか数年で緑宝寺代行になった。たしかに、朱崩の言う純粹じゆんじゆんの源流術師とは、ちよつと違つ。

「それは…それは、以前はどうあれ、あなたが十分に源流の者になつたと認められたからです。他流の者をそのままに入れるのとはわけが違います」

「他流はまずいのかい」

空諾は自分の口調くちやうに皮肉を混ぜないように苦労していた。けれど朱崩の一言は、その苦勞を無残にも打ち砕いてしまつた。

「当たり前です。衝派源流にかなう流派など、この世にありません！」

緑宝寺の顔は、もはや内面の思いをそのまま出す

ほかなくなつていた。

と、そこへ表から声がかつた。

「宗珀そうはく、ただいま戻りました」

渡りに船とばかりに、空諾が扉に飛び付く。

開いた扉の向こうに見える緑宝寺の表情に、宗珀は面食らつてしまった。なにせこの仕事は幾度いくどとなく勤めて来たが、ここまで歓迎されたことはない。

彼は困惑しながら、それでもいつもの習性に従つて、茶の包みを手渡していた。

「ごころうさま。さ、まず一杯目は君だ」

言いながら空あいている席へ座らせる。その隣では朱崩が、わけがわからないといった表情で、成り行きを見守つてゐる。

緑宝寺は部屋むまの奥まで跳ねるように進むと、今まで暖めていた急須きゅうすに、いま受け取つた袋から一つまみほど茶をすくい取り、入れる。その隣ですでに用意されていた湯を注ぎ、やはり暖めていた湯飲みに

注いで背後の席へ。

次々と、まさに流れるように動いて行くその手さばきは、まるで舞っているかのようだった。

「さ、冷めないうちに……」

はっ、と我にかえる。うかつなことに、二人とも目の前に湯飲みが出て来たことにさえ気がなかったのである。

宗珀は、空諾の再三の勧めに湯飲みを手に取るうとして、妙なことに気がついた。

水面が、揺れている。

「??」

再び手に取るうとしたその体が、いきなり押し上げられた。

「なんだ!?!」

あわてて二人を見る。自分と同じく、椅子にしがみついているところを見ると、これは自分だけのことではないらしい。目を閉じ、とにかく落ち着け、と

思う。

ときおりばたん、ばたんという音がする。どうも中堂の大扉が開いたり閉まったりしているようだ。してみると、これは横に揺れているのだろうか？

その疑問は目を開ければ解けた。自分の身体は椅子ごと前後左右にずりずりと動き回っていたのである。

宗珀はそのまま素早く左右を見た。空諾はもとより、朱崩もそれなりの術師である。この揺れの中で、いや揺れているからこそ、じっと身を守りながら鋭い目つきであたりをつかがっている。

そして揺れは、はた、と止んだ。

「誰だ、今のは?」

空諾が思わずつぶやく。

術師の常識からすれば、誰かがまた、術を失敗したと考えるのが当然であった。

そこへ、黒つばい珠を抱えた十四、五の少年が駆け込んで来た。

「緑宝寺さま、辰台しんたいより伝令！」

いまの揺れは、地震です。術じやありません。周囲の光に、特に変わった動きなし!!」

ほつ、とした空気が、あたりに流れた。

各々おののおのが強大な力を持った術師の集団だけに、訓練に失敗したときの被害は相当なものになる。

非常時の集会場であり、普段は使いもしない中堂が、緑宝寺の中央にでん、とあるのは、万一のとき壁になるためでもあった。

「ごくろうさま貞視ていし。で、地震とすると、源みなもとはどこあたりだい?」

「はい。観辰かんしんからすると、緑宝寺の東、およそ二百(注)五十里」

空諾の笑みをたたえた顔から、眉だけががびく、と跳ねた。

「東、二百五十里?」

そう言いながら、後ろ手でなにかを掴むと机に広

げ、顔を埋める。緑宝寺こぼくじでは珍しい、紙に描かれたそれは、地図であった。

三人が注目する中、指を広げて距離を測ること半刻ほど。がば、と上げたその顔は、その場の全員を震え上がらせるに十分だった。

「あの村の……真下だ!!」

七

夕暮れの緑宝寺。あたりの木々が夕日に染まって、刻々とその色を変えてゆく。

ここで暮らす者たちの多くが好む、こののどかな風景…しかし、今日はかりは違っていた。風景を引き裂く音が、辺りにこだまする。

カン、カン、カン、ドン

カン、カン、カン、ドン

高い鐘の音が三つ、低い太鼓の音が一つ。非常招集の合図である。女坊にょぼうの女性たちと、医坊の医呪師

範たちを除く全員が中堂へと駆け寄る。

最高師範とそれに準ずる者たちは、中堂の奥にある一室へと集まる。

緑宝寺全体が、一気に動きだした。

「お揃いですな」

中堂の奥、奥堂と呼ばれる小部屋に最後に入って来たのは、医呪師範の長である寂だった。

「遅いよ寂さん」

一番奥にいる緑宝寺のとなり、倒魔術師の長が口を尖らせた。

衝派源流の術師は、本来の敵である『空魔』との戦いで役割により、大きく三つに分けられる。

まず、異なる世にいる空魔を、むりやりこの世に引きずり出す握魔術師。

出て来た空魔を討ち倒す倒魔術師

そして、討ちもらしたときに元の世に封じ込める

封魔術師。

いまここに集まったのは、それらの長と女坊の長である梨環。そして、彼らとは独立して行動する医呪の長、寂である。

「こりゃ失礼。ところで緑宝寺、医呪法師十二名、全員準備を終えております。薬草も申し分なし！」

空諾はため息をついた。

「せめて遅れるとが、伝令出して下さいよ…まあ、こ苦労さま」

それだけ言うと、視線を全員に移す。

「あの村のことは今更言うまでもないでしょう。」

いま、二人ほど様子を見に行ってもらっています。が、被害の度合にかかわらず、救援に向かいます。

まず仙跳さん

は、と握魔術師の長が答える。

「村の出入口に跳結界を張って、外から入れないようにして下さい。それから浄芥さんと杯代さん」

倒魔術師と封魔術師の長たちが同時に返事をした。

「風乗りだけをまとめて、一団を編成して下さい。そして、好きなものを十分に食べておくように。おそらく彼らが最も疲れることになるでしょうから。」

厨師たちにはその旨、お願いしますよ。」

最後の部分は梨環に向かつて言った。彼女は黙ってうなずく。

「寂さんは医呪師たちを、まず半分送って下さい。先々の状況がわかったら伝令を。必要なものを持たせて、残りの半分を行かせましょう。」

寂は大きく二三度うなずいた。

「わかった。おい浄芥。風乗りの長、誰にする?」

「ん、猪虚あたりがいいんじゃないかな…。」

ちら、と林岱を見る。視線の先であごが大きく引かれた。

「よっしゃ、じゃわしやそつちへ。」

「あ、寂さん。衝旗は朱崩に任せますから、従って下さいよ。」

医呪の長は、背を向けたまま手を振ると立ち去った。

「緑宝寺、朱崩に衝旗を…指揮を任せる、っていうのは?」

全員が、まさか、という顔で見つめている。緑宝寺はややためらいぎみに、

「うん。だめかな?」

他の者の視線を受けて、仙跳が言った。

「力が無いとは言いませんが、あの『粹流』狂いで大丈夫でしょうか?」

空諾は、妙にほっとしたような笑みを見せた。そして、他の者たちが不思議そうに眺める中、はつきりと言つ。

「だから選んだんだ。大丈夫、万が一のことは考えているから。」

八

中堂には人が詰め掛けていた。

総勢八十二名の術師たちとその長、そして女坊の長。術師たちはいずれも、木綿の衣服と覆面をつけてずらりと並んでいる。

部屋の大きさに比べれば大人数とは言えないが、緊張した雰囲気のせいか、やけに狭く感じられる。

「…被害の概要はいま聞いたとおり、予想外にひどい」
中堂の中、一段高い台に乗って緑宝寺が話している。
隅の方では、いま村から戻って来たばかりの風乗りが二人、医呪法師の手当を受けながら、医呪の長に村の怪我人たちの状況を話している。

「朱崩!!」

はい、と軽くうなずきながら蒼の覆面をつけた男が前に出た。

「衝旗は、きみに任せる。まず住人の無事、次に住居の無事だ。順番を間違えるなよ」

隠しから取り出した、蒼い小旗を覆面の耳の当たりにさす。朱崩は礼をとると、一步退いた。

空諾は、術師たちをひとりひとり点検するように

見つめながら、

「術は『滅呪』を除きすべて許可する。

また、どうしても必要とあれば、『滅呪』の許可も辞さないつもりでいる」

静かだった中堂がざわついた。『滅呪』は術の中でも空魔以外には使ってはならない、と代々の緑宝寺によってきめられて来たもの。その決まりを、緑宝寺自らが『破つてもよい』と言っているのである。驚くのも無理はない。

空諾はざわめきを手で制した。

「緑宝寺は、私と、最高師範位が守る。できる限りの手をつくし、あの村を……救ってくれ!」

おう!と全員が叫び、朱崩に続いてはたはたと中堂を後にした。

人気がなくなった中堂で、緑宝寺はふう、と息を吐いた。

目は正面の大扉を見るともなしに見つめ、やや肩

を落としてじつとその場に立っていた。

(やはり向いてないな…命令なんて——)

ぼつと考えているその背後から声がかかる。

「緑宝寺さま、私たちは…厨師の他に指示がありませんが？」

梨環だった。空諾はびっくりして振り返ると、早口で応える。

「ああ、そつでした。とにかくこはんを沢山たくま作たくまつておいて下さい。みんな忙しくなるから、厨師だけじゃ足りないだろうし」

はい、とひとつ返事を残して、女坊の長が去っていった。

女坊の隅々に明かりがとまり、どたどたという足音とともに、湯気ゆげと醤油しょうゆの匂いが立ち昇る。緑宝寺全体が、なんとなく暖かく感じられるほどの熱気である。

その雰囲気を五感すべてに感じながら、緑宝寺は不意に自分の頭を叩いた。そして、今度は真剣まけんな面持おもて

ちで奥堂へ戻って行った。

九

『脱虎門』を出てしばらく進み、おもむろに道を外れて森の中へ入る。

やや広くなっているところで、風乗りたちが待っていた。

「でも変だなあ。たかが辺鄙へんびな村一つのことです、『滅呪』まで使うかもしれないなんて」

「たしか、あそこは茶の仕入れ先だろ？ まさかたあ思つが、茶を守るために行かされるんじゃないだろうなあ…」

背後から聞こえる軽い口調に、朱崩しゆまつがため息をついた。

風乗りたちにも聞こえていたらしく、やれやれといった表情で相手を見ている。

「茶がなくなつて困る奴なら、まあ何人かはいるだ

47 番外一 いのちの綱

るうけど…」

風乗りの準備をしながら、宗珀そうはくが口を開いた。

「あそこにはね、緑宝寺りくたうじに直接通じる風路ふうろがあるんだよ」

風路。読んで字のごとく、風の路みちである。

「ここでいう『風』はただの風ではない。この世を幾重いくえにも取り巻いて流れる、風光ふうこうと呼ばれるものである。術師のうち『風乗り』はこの風に乗って、数百、数千里の彼方かなたまであつという間に飛んで行ってしまう。」

……と、こう言ってしまうと便利に思える『風』だが、実は一つ欠点がある。『風の流れに乗る』ということは、裏をかえせば『風の流れないところへは行けない』ということなのだ。

風は日々その流れを変える。しかし、ごくまれに、流れを変えない風がある。これが、『風路』なのである。

「なるほど…逃げ道ですか」

答えたのは、先ほど軽く言っていた男らしい。

緑宝寺は岩だらけの土地に作り出された縁とての砦とりでである。万が一襲われたなら、そして万々が一追いつ返せなければ、逃げる場所などありはしない。

朱崩はぐつとうなずく。宗珀の手を取り、風に乗る準備を整えながら

「そういうことだ。あの村は、我々のいのちの綱なんだ…」

十

三人の風乗りに囲まれながら、一度に十数人が風に乗って行く。

風の中…色のない世界がふ、と終わりを告げると、そこもやはり森であった。

ただし、雰囲気は一変している。

暑い。明るい。冬の夜だというのに。

火災が起きているのに違いなかった。

後からあらわれた者たちと共に、村へと向かう。朱崩の覆面の下では、汗が一つ流れていた。

目の前は、まさに惨状さいじょうと言ってよかった。

炎はもちろんのこと、それ以前に家に潰されてもがく人、もがくことさえできない人。それを免れても、この寒空の下に薄着で震えている人…

茫然ぼうぜんとする朱崩の脇から、寂が飛び出した。

「うおし、かかるぞ。」

ちぎれてるやつやはぜてるやつあ、とりあえずつなげ！

臍物モツやられてるやつあこつち奇越よこせ。慶治けいじ、お前まへは菓粥くすりかゆ、急げよ!!」

白い衣装に白覆面の一団が動きだす。そこから中から怪我けが人や、それよりひどい人を背負い、あるいはちぎれた体の一部を拾い集め、村はずれの広い空き地で治療をはじめた。

ここで朱崩はようやく我にかえった。集まった術

師たちを三つに分け、消火、崩れた家の撤去、そして巻き込まれた人達の避難誘導を命じると、腕組みをしてあたりを睨にらみつけた。

もともと、この種の仕事は好みではない。術をふるって、動き回る方が自分には合っているのだ、と思う。だが、頭の旗がそれを許さない。

やや苛立いらだちながら立っているその裾すそが、ぐい、と引かれた。見ると腰に届かないほどの小さな女の子が、全身の力を込めて足を揺ゆするうとしていた。

（なんだ、こいつは？）と思いつつ、その視線まで頭を下げると、今度は頭に抱きつきながら叫んだ。

「おかあさん！」

朱崩はわけがわからず、ただ目を丸くした。

「おかあさん、助けて!!」

ここで初めて、彼はその意味を把握はあくした。なおもしがみつく女の子を抱いて、すつくと立ち上がると、その顔を逆に向ける。

「見て見る。私の仲間がみんなを助けている。きみ

の母親も、きつと助かる」

静かで、自信に満ちたその声を聞くと、女の子の叫びはやんだ。

「おおい、庶宜！」

朱崩の声に、村人の避難にあたっていた術師の一人がやってきた。朱崩は女の子をひよい、と持ち上げて、

「この子の親がないそうだ。探してくれ」

庶宜は黙って女の子をじつと見ていたが、ひとつうなずくと、瓦礫の山へと向かって行った。

朱崩は女の子を肩に乗せ、再び炎を凝視している。子供は身体を倒し、覆面の中の目を覗き込むようにじつと見た。

「おじちゃん、だあれ」

朱崩の目が一瞬和む。軽く目をつむり、再び開いたその眼は、湖水のように透き通っていた。

「関係ない。…けど、この村は必ず救ってやる。必ず！」

村は中に入るほど被害が増していた。家の撤去を命じられた術師たちは、その中心の家二、三軒に人がいないことを確認すると、光雷破などの破壊術を使って更地にする。そして、周辺の家の屋根や柱を、順番にそこへ集めて行った。

集める方法は人それぞれで、風に乗って走り回る者がいるかと思えば、壊れすぎないように部分的に境界で覆っておいて、雷撃呪法を打ち込むといった荒っぽい者もいた。

見る間に減って行く潰れた家と、見る見る膨れ上がる瓦礫の山の影を、村人搜索の一団が走り回る。彼らは、ときおり立ち止まって目をつむり、耳を澄ませるようになっていた。

『光』のうち、人がそれぞれ中に持っている『内光』を探しているのである。もちろん、たまには犬やネズミのもつそれと勘違いをすることもあるが、少

なくともこの搜索で、『生き物があるかどうか』だけははっきりする。

搜索に当たった術師の多くは潰れた家の回りをくまなく探していたが、彼、庶宜だけは別の場所へ向かっていた。別に、根拠があるわけではない。ただ、こちらを先に調べなければまずい、と考えたから。すなわち、轟炎の中である。

手をぐいと伸ばしながら、左へ、右へと動かしてゆく。その手が、ふと止まった。燃え盛る火の方へ一步、二歩と歩き、大きくうなずくと、そのまま朱崩の許へと駆け戻った。

「朱崩、炎の中に一人いるぞ！」

朱崩の顔がこわばる。覆面の上からもわかるほどに。間違いない。この子に近い光…この子の親だ!!」
肩の重みが動いた。

「おかあさん!!」

腕を伸ばし、火の中にいるなにかをつかむように

する子供を、ぐっと引き寄せると、まわりを見回して思い切り怒鳴った。

「宗珀、いるか!!」

青い衣がふわりと目の前にやってくる。左手に水の入った瓶を持って。

「呼んだ？ 悪いけど、いま忙し…」

朱崩は鋭い視線で言葉尻を抑えつつ、子供を肩から降ろした。そして、まっすぐ腕を上げる。

「あの中へ飛ばしてくれ」

指さす先は、轟炎の中心。

「お、おい、正気か？」

「いいから早く！ 人ひとり死ぬかもしれない!!」

宗珀は、瓶の中身を黙ってぶちまけた。朱崩の頭から腰にかけて、ずしりと重くなる。

「わかった。俺が行くまで、生きてるよ」

言いながら朱崩の腕をとり、炎の中心を睨みつける。相手が返事をする前に、その姿は消えていた。

瞬まはたき一つの間に、景色は一変していた。見えるのはただ炎。覆面に染み込んだ水が、あつと言つ間に湯気へと化してゆく。

(どこだ?)

口を開くことはできない。それほどの猛火もっかなのである。人が生きている、ということが不思議でならない。

(いや、まてよ)

目をつむり、考える。崩れた家。押し寄せる炎。辺りに水はない。その中で生き残れる場所は…?

「土の中か!」

思わず口を開いた。覆面越しとはいえ、熱い風を喰くらった喉のどが燃え上がり、なんとか冷やそうと咳せきをする。そのまま地面に突つ伏すと、目の前に井戸のようなものが見えた。咳き込みながら、そのなかを覗のぞきこむ。

浅い。大人の背丈せたいけより少し深いくらいの井戸の底

で、焦げた布が動いた。

(人か?)

思うが早い、朱崩はさつと飛び降りると、それを抱きかかえた。顔らしき部分の布を剥ぐと、出て来たのはあの女の子に似た女性の顔だった。

一つ大きくうなずくと、女性を抱きかかえたまま、朱崩は印を決めた。

「絶崩!!」

叫ぶと同時に足元が地の底へと崩れてゆく。周囲には土が舞い上がり、炎に焼かれて落ちてゆく。そのさまは、まるで溶岩が吹き出すかのようだった。

と、その途端とたん、耳でなく、体に突き刺さるような声を感じた。

「つかまれ!」

同時に、目の前に手だけがにゅつと現われる。朱崩が印を解いた手でさつと握ると、抱えていた女性の重さがなくなった。だが彼は油断しない。次の瞬間、再びどっしりとした重みを感じると同時に、幼

「目が正面にあった。」

「おかあさんだ。間に合ったぞ！」

十二

朱崩がもとの、村を一望できる場所に居るころには、壊れた家の撤去も半分ほど終わっていた。

しかし、まったく解決していない問題もあった。火である。

「だめです。勢いが強すぎる！」

「水がないのか。くそっ!!」

最大の誤算は、水の少なさにあった。川が近くにあるため、すぐにでも使えると思ったのが大きな間違いだったのだ。

「破呪で吹き飛ばして……」

誰かが言った言葉に、朱崩はすぐ反応した。

「よせ！火の粉が飛ぶだけだ!!」

……とりあえず、回りの家を結界で覆って、燃え広が

るのを防ごうとはしているものの、火だけを避けてすべて包むというのは難しい。だいたい、あの『門森』などは隠しようがない。

「くそっ！これだけ術師がいて、火一つ消せないのか！」

地に打ちつけた朱崩の拳が、その場にいた術師たちすべての気持ちを代弁していた。

十三

一方、医呪師たちが治療している広場。

薬粥を作り終えた慶治が、病人たちに配ろうと入れ物を探していると、寂の姿が目に入った。

額に手を当てながら、しきりに考えこんでいる。「どうかしたんスか？」

医呪の長はちよつと振り向くと、また元に戻った。

「いや、さっき朱崩から預かった怪我人なんだがなあ。たしかに火傷もあるけど、もとからある病気の方が

ひでえみてえだ。診ろよ、この脈」

慶治は細い腕を軽く握り、目をつむった。

「はあ、なるほど。精気が弱ってるんすね。ンなら『増光』かけてやれば…」

寂はやれやれ、と頭を振った。

「だからお前は気が短えってんだよ。」

精気は光から生まれっけど、すぐってわけにやいかねえ。弱った体に『増光呪』かけんなあ、こりゃ最後の手だ。ヘタすりゃ、光が増す前に体がはちきれちまう」

言いながら、慶治の薬粥に指を突っ込み、

「こつこつときによ、薬草が一番なんだが…これじゃあなあ」

慶治はちよつとムツとして、なかば怒鳴るように言った。

「なら、練精呪スー！」

練精呪。光を精気に転化する術。人に使えば病氣

の身体に精気を与え、花に使えば、種から一瞬にして花を咲かせる術である。しかし――

「慶治、おめえ命いくつ潰したかわあってんのか？俺たちやこのひとたちのいのちの綱なんだぜ」

寂は怒鳴らなかつた。ただ淡々としたその声に、青年はぐつ、とつまつた。だが、拳を握り締めてすつくと立ち上がる。

「この人は、訓練のための種じゃないス。俺の患者なんス。俺の患者は、俺が治すんです!!」

寂はちよつとだけ黙つた。ふと眼光がゆるむ。それを隠すようにくるりと後ろを向き、

「最後まで氣イ抜くな。」

それさえ無きや、おめえは衝派最高の医呪師だ」

一言残すと、薬粥の鍋を持って立ち去っていった。

「こちらは宗珀。緑宝寺からの人員運びも一段落したので、個人的な探し物をしている。」

「あの茶屋は、たしかこのあたり…」

誰に言つともなしに口にしたながら歩いていけると、その目に、文字をひとつ染め抜いた緋色の布が飛び込んで来た。

鮮やかな「茶」の一字。

宗珀は真っ青になつて『風』に飛び乗る。

並みの風乗りにはとつてい乗れない、低空をゆく風。風は低く流れるものほど、流れが遅い。しかしすぐに落ちてしまうという欠点がある。

その風に乗りながらさらに印を決める。灰色の間の一部がすうと開き、あたりの様子を映しだす。

折れた柱が迫つて来て、ぶつかると思える瞬間にわけのわからないものになる。そしてすぐにまた目の前が広がる。柱を通り抜けたのである。

木でも土でも鋼でも、風にとつて、そして風に乗っているものにとつては竿の目よなもの。その理屈をわかつている者などいやしない。もちろん、宗珀も例外ではない。ただそういうものだと感じるのみである。

藁の屋根を突き抜けて上へと向かう風から、また別の風に乗リ換えて再び家へ戻る。

(いた！)

瞬時にすべての術を解く。勢いあまつて老人から二丈ほど離れてしまった。これほど短い距離では、さすがに風は使えない。やむを得ず崩れた柱の間を這いずつて、ようやくたどり着いた。

身体を抱きかかえると、ぬるつ、とした感覚があった。確かめるまでもない。血である。

あわてて老人の首筋に手をあてる。脈は…ある。

口元に手をかざす。息も…ある。

ほっとしたものの、事態は急を要する。抱きかか

えてそのまま風に乗ろうとする…が、できない。さつきまであれほど吹いていた風が、びたり、止まってしまっていた。

「くそっ」

思わず悪態をつく。すると腕の中がもぞもぞと動きはじめた。

「だいじょぶか、おいちゃん」

「お、おお。誰だい、あんた？」

ふ、と目がゆるむ。風を感じたのだ。外へ向けて吹く、高く、強い風。

「気をしっかり持ってくれよ。これから、外へ飛ぶからな」

「とぶって…？」

言いおわるより早く、あたりは灰色につつまれた。

十五

「うわっ」

寂がこんな声を上げるのは珍しいが無理もない。目の前にいきなり、人が落ちて来たのだから。

ひと呼吸すると、思い切り怒鳴る。

「バカヤロウ！ 怪我人の中に降ってくるたあ、どういっつもりだ!!」

「運ぶ手間あ、省いただけですよ。寂しい」

抱きかかえた老人を庇って打った首筋をさすりながら、宗珀が応えた。

「はい、一人追加です」

宗珀は老人をその場に寝かせた。

寂はざっと外傷を見て、すぐに術をかける。見る間に傷が塞がり、出血も止まった。だが…

「血が…足りねえ」

彼の切羽詰まった言葉に、回りの者たちがぎょっとした目を向ける。

「血…って、寂しい、そんなもん生きてりゃいくらでも増やせるんじゃ…」

医呪の長は、患者から目を離さない。顔は真剣そ

のもので、泣きそつにさえ見える。

「ああ、『増光』や『練精』使やたしかに血も増えんだけど、それまで待つてらんねえ」

宗珀の顔から、血の気が引いた。口元が震えている。

「いや、手が無えわけじゃねえんだ。手っ取り早いなあ、他の血い混ぜちまうつてんだが…」

「他の血でいいのか。なら、俺のくれてやる！」

以前まえに瀧たみたいに血を流したことだつてあるんだ。

じいさんの一人分ぐらいなら、どつつてこた…」

目の端に涙がにじんでいる。寂はその肩を抱かかえる

ようにして言葉を止めてやった。

「嬉しいけど、ちと無理だな。へたすつと血が固まっ

ちまって即、死んじまう。たまにうまくいくなあ、親

子とか兄弟とか、身内の場合だけだ」

ふと、宗珀は黙り込んだ。

「…寂じい、おっちゃんほどのくらい持ちますか」

「ん？うーん、俺がかかりきりになって…それでも

六刻もつかどうか、つてとこだな」

風乗りは小さくうなずくと、くるりと後ろを向いた。

「わかりました。じゃ、その『血い混ぜる』準備、お願いします」

「おいおい、聞いてなかったのか？あれは身内でないきゃ…」

一瞬見えた、その目の色に驚いて、医呪師の長の声が上擦うわつた。宗珀は逆に淡々と、

「だから、身内を連れてくるんですよ」

言つたり、その姿は空へ溶けて行つた。

朱崩はまだ炎を睨にらみつけている。

家の片付けの方が終わつて来たので、手の空あいている術師が交代で結界を張り、延焼を防いで消えるのを待つ策そを採つたのである。

しかし、火はなかなかおさまりそつに見えない。そ

の場の誰も、苛立いらだつていた。

その朱崩の脇に、いきなり人が現れた。そのまま、

門森の方へ駆け出して行く。

「お、おい宗珀、どこへ行くつもりだ？」

「緑宝寺へ戻る！人ひとり死ぬかも、しねない!!」

朱崩はその場であっけにとられていたが、風乗りたちをまとめている猪虚の毒づく声に、はっと我をとりもどした。

なかば灰になっている覆面をなおしながら、また炎の方へ目をやる。もう、睨んではいなかった。

十六

門森から緑宝寺までを一息でこなし、脱虎門をくぐった宗珀は、目的地へ向けてひた走った。

目的地は、女坊である。

だが、そこまで行く必要はなかった。

「どうしたの、宗く…いえ、宗珀さん」

炊き出し用の大皿を抱えた芳里が、厨房へ向かう途中だったのだ。

「いいところに！さ、村まで来てくれ!!」

宗珀は乱暴に腕を掴むと、そのまま風に乗ろうとする。

「おいおいどうした、宗珀。こんなところで…」

中堂の脇から、緑宝寺が顔を覗かせていた。

緑宝寺内で、風乗りは通常禁止である。宗珀は握った腕をぱつと離して、

「宗珀、衝派術師としてではなく、芳里の友として、緑宝寺どのにお願い申し上げます！」

いまは非常時である。非常時だからこそ、この言葉に空諾ははつとなつた。

足早に近づくと、宗珀に話をうながす。

彼は、茶屋の主人のことを手短に話した。話が終わる前に、芳里が頭を抱えてうずくまる。

「お爺様が!?!」

そう、彼女は茶屋の孫娘なのである。

「お爺様が…でも、あたしは…」

宗珀は、芳里の両肩を掴んで立たせようとした。だ

が、彼女はその手を思い切り振り払う。

宗珀はついに怒鳴った。

「売られるのがいやで、逃げて来たっていうのは知ってるよ。そのせいで、芳ちゃんのご両親が重労働しなきゃならなくなつて、死んじやつたつていうのもね！」

でも、それならなあさら、お爺さん助けなきゃ！

これ以上、逃げてどうするんだよ!!」

芳里は、耳を押さえていた両手をゆっくり離した。

「どうしても嫌だ、つていうなら、覆面してもいいよ。せめて、血だけは分けてやれよ」

そのまま顔を上げて、宗珀の瞳を見る。空諾は二人の様子を、黙って見つめていた。

そこへ、後ろから声がかかった。

「どうしました？」

うずくまっていた芳里までがはつと振り向く。そこに、梨環が立っていた。いままでにない厳しい目をしながら。

宗珀はまた手短かに話す。

「血を分けに、つれていきたい、ということですね」

口調が冷たい。

「でも、血を与えたなら、正体はわかるでしょう？」

「

宗珀はうつ、と詰まりながらも、梨環に詰め寄った。

しかし、口を開こうとした瞬間、手で抑えられる。

「わたしは、あなたに訊いているんです、芳里。帰りたいのなら、もうここへは戻れませんよ。それでも……？」

芳里はうつ、と立ち上がった。赤くなった目をこすり、まっすぐ女坊の長の瞳を見つめて、

「はい。いくら気まずくても、いのちには代えられません。」

あたし、帰ります」

梨環はにっこりと笑って、芳里を抱きしめた。

「惜しいけど、仕方ないわね

認め^{みと}めますよ。緑宝寺さま、よろしいですね？」

少し離れて見守っていた空諾は、笑いながら近づくと、芳里と梨環の肩をぼん、と叩いた。

「女坊のことに、口は出しませんよ。」

じゃこれから、ここでの思い出を消すから……」

そう言うのと、二人を離して、芳里の額ひたいに手をあてた。

とたんにその身体からだがぐったりとなる。あわてて宗珀がそれを支えた。

緑宝寺は、宗珀が娘をしつかり抱えたのを見て、

「風路まで風で行くことを許す。ゆけ！」

宗珀はさつと礼をとると、娘を抱えて消え去った。

女坊の長はふたりの消えた場所を優しい目で見つめていたが、いきなりくるり、と振り向いて言った。

「緑宝寺さま、よろしいのですか？」

にやにやと笑いながらのその言葉に、空諾はちよつと頭を掻かいた。

「消すふりしていたの、気付いてましたか。まあ、彼

女はそれほど知りませんし、ばれたらばれたときですよ。

……あまり無粋ぶすいなまねはしたくないですしね」

にやにや笑いは、さらに強くなる。

「若い子ですからねえ、ふたりとも」

十七

芳里をつれた宗珀は、全力で風を乗り継ぎ、彼女を寂に預けるとそのまま立ち去った。

彼の腕は信用出来るというのもあるが、なにより、これからまったくの他人になってしまう彼女を、これ以上見ていたくはなかったのである。

芳里を残した宗珀は、壊れた家の方に向かっていった。無駄に動き回ったつもりはないが、そろそろ風乗りが足りなくなっているかもしれない。

適当な風がないので、怪我人たちの中を歩く。さつきまででは気付かなかった暑さが、妙に増したように

思える。

「でも暑いなあ。これじゃ怪我人はたまつたもんじゃないぞ。あの火、まだ消せないのか…?」

と、その瞬間、目の前で寝ていた男がむっくりと起き上がった。

「ほのお…ああ、——が燃えている…」

びっくりした宗珀は、男の口元に耳を寄せて、炎のことを訊ねてみた。

そして、「二言三言聞き取ると、

「な、なんだって!!」

一言叫ぶなり、血相を変えて走り出した。

十八

緑宝寺の森の中。先ほどまで風乗りたちが行き来していたこの場所も、ほとんどの人員を運びおわつた今となっては閑散としている。そこにはただ一人これから来るであろう炊き出しを運ぶため、ぼつん

と立ち尽くす男がいた。

つい数刻前までは、脱虎門の方をちらちら眺めたりもしていたが、いまはただ辺りを見るもなしに見ているだけである。

もちろん彼は一人前の術師であるから、この役目の重要性を理解できないわけではない。緑宝寺側の要であるこの場所では、いつ何時、何が必要になるかわかったものではないからである。

とはいえ、自分だけがここですべてもぼつんとしていなければならぬというのは、なかなか納得しがたいことではあった。仲間たちはあの村で走り回っているというのに——

風乗りの印である薄い蒼の覆面を、ほどいては結び、ほどいては結び。いらいらと考えつつける彼の耳に、馴染みのある声が響いた。

「次はわしじゃ。蜀風、たのむぞ」

びっくりして声の方を見ると小さな人影。薄い緑の覆面は、どの呪役にも属さない証拠。

「成阿せいあどの、あ、あなたまで出るんですか!？」

「なんじゃ。わしでは不安かな」

曉成阿あきせいあ。

術師たちの宿敵である空魔がいつ現れるかを予見する、透形師とうけいしとして長年働いていたこの人物は、先の透形の際におのれの持つ力を使い果たし、隠居いんきょしていたはずである。

あきらかに疑いの眼差しまなざしを送る彼に、成阿は目だけでこ、と微笑みを返した。

「若い者にやできんことがあるんじゃよ」

そのまま手をぐつと握り締める老人に、かける言葉はなかった。

十九

炎の前。結界を張りつづける術師たちにも、疲れがみえはじめた。

「らちがあかん。朱崩、あの中に光雷破こうらいは打ち込んで

いいか」

爪を噛みながらそう言ったのは、いま結界張りを交代したばかりの奏壁そうへきである。

「光雷破だつて!？」

口にしてからはつとずる。自分でも恥ずかしくなるほど、呆れた声だった。

「ああ。結界で延焼えんしょうを抑えちやいるけど、そんなに持つもんじゃないだろ、だから周りから同じ程度の力で光雷破ぶち込むんだ。そうすりゃ——」

言葉を遮さへぎって、朱崩の鋭い声が飛んだ。

「中に人は?」目は炎を見つめたまま。

「先程調べ終えました。少なくとも、生きている人はおりません」

いつのまにかやってきた庶宜が、奏壁の肩越しに答える。

朱崩は腕を組んだ。

『壁』の結界では右に出るもののない奏壁が言うのだから、術師たちの疲れがどれほどのものか、わ

かるうというものである。

先ほどの庶宜にしても、左肩にはなかば乾いた血の痕が、灰色の服を紅く染めている。

人により差はあるものの、みんなこういった状態なのである。

危険かもしれないが、いちか、ばちか…

「よし、四、五人で取り囲んで光雷破だ。四方から押し潰せ！」

鋭い言葉を受けて、術師たちがばつと散った。

期待を込めた炎をみつめる朱崩の目に、見覚えのある老人の顔が飛び込んで来た。

「成阿さま！よ、よく緑宝寺が許可を出されましてね」

門森から出て来た老人は、緑の覆面を何度も直しながら朱崩へ近づき、背伸びをしてその両肩をぱんぱん、と叩いた。

「ふむ。そうさな、今ならどんな罪でも許されそう

な心配じゃったな…ま、それはともかく。村人たちはどこかね？」

怪我をしていない村人は、病院がわりの広場のそばに集められている。朱崩がそう教えると、老人はその方向へ歩いていった。

成阿のあだ名は『風乗りいらす』である。老人らしく、のんびり歩いているように見えるが、気がつくくと一里も先にいる。

いまもその足で歩いていたが、その脇をかすめるように男が通っていった。

(あれは、たしか宗珀じゃ…)

振り向いて確認しながらも、足は勝手に前へ動く。おかげで今度は自分からぶつかりそうになった。

「わっ…とと、失礼。どうかね、寂さん」

相手はどうやら気付かなかったらしく、ゆっくりと振り向く。

「おお、ご老体。わざわざご苦労様です」

略礼のつもりか、半身はんみをねじつたまま頭だけを下げていた。よく見ると、手は型を決めて、目の前に横たわるの老人と娘に術をかけているらしい。

成阿は礼をとると、その身体を前へ向かせ、

「体の怪我の方は頼みまずぞ。わしは別の方でやる
でな」

それだけ言うと、怪我人の海をゆっくりと一少なくとも本人にとつては一歩いて行つた。

「おやさん、ありや誰です？」

よつやく『転血』の術を終わつた叔が振り向くと、慶治が立つていた。

「口の利き方に注意しろよ。あの方は衝派きつての透形師とうたわれた成阿どのだ」

慶治は老人の後ろ姿を見ながら、ふん、とひとつ息をついた。

「はあ、お偉い方つてのはわかりますけど。隠居が来たつて役に立つんスかね？」

「まあ見てろ。お前よりやよつぽど役に立つ」
寂はその場にどつかり腰をおろし、成阿の方をまぶしそうな目で見ていた。

広場のはずれには、朱崩の言うように村人たちが集まつていた。しかし、誰もかれもみんな呆けたように黙り、視線は何もない宙をあてもなくさまよっている。

彼らのそばによつた成阿は、顔についている余計な布をはぎ取りはじめた。

緑の覆面をなかばほどいたその顔は、深いしわを持つ老人の顔。落ち着きと慈愛じあいに満ちた表情を包み込むかのように、白く長い髪が垂れている。

「どうしたね」

老人ながらしっかりとした声が響いた。大声でもないのに、深く、染み込むような響きだった。

この声を聞いた途端とたん、村人たちの表情が変わつた。老人を、まるでなにかまぶしいものでも見るかの

ように振り仰ぎ、我先われさきにと寄よって来たのである。

成阿は村人たちが自分の境遇を訴えるのを、ひとつひとつ、聞いてやっていた。

表情を変えず、余計に話すこともせず、ただ、うなずきながら…

「ど、どうなってんスカ、こりゃ!？」

慶治は、自分の目が信じられなかった。

手のつけようがないくらい、すべての氣力を失ったようだった村人たちの顔色が、目の前で見える間によくなっているのである。

寂がにやりと笑った。

「だから言ったろ、おめえより役に立つ、つてな。

よく覚えとけよ、慶治。いのちの綱なわつてのは、身体みの傷だけ治しやいいつてもんじゃねんだぞ…」

炎の回りへ散った術師たちが術の準備をしている。朱崩はそれをじっと見つめていた。

しかし、なにかひつかかる。

「朱崩」

背後からいぶかしげな声がかかった。声からして、おそらく猪虚ぶこだろう。朱崩はそちらを見ずに軽くうなずいた。

「妙だと思わないか？」

言いながらすぐ脇までやって来る。朱崩は顔を炎に向けたまま、目だけが声の主を追う。

「いや、俺達が来てからすでに十刻じふせき近くになるだろ。それに結界で逃げ道ひきみち塞いでるつてのに…なんでまだ燃えてるんだらう?」

「……」

言われて朱崩も首をかしげた…心の中で、だが。

たしかにおかしい。山が火を吹いているのではな

いの中から、結界で封じ込められた炎が五刻も六刻ももつはずがない。なのに

そこへ、宗珀が飛び込んで来た。

「朱崩！ありや油だ!!」

疲れているせいか、走り方がめちゃくちゃである。とうとう石につまずいたところを、朱崩が両腕で受け止めた。

だが宗珀は、立ち上がる暇も惜しんで言った。

「村の…長に聞いたんだ…ありや、冬場のために溜めてあった油が…油が燃えてるんだよ!」

とどこどころ咳き込みながら話していたので、聞き取るのに時間がかかる。が、その意味を理解した瞬間、その場にいた者すべてが同時に叫んだ。

「なんだって!?!」

一瞬、その場を無気味な静けさが支配した。

はっと我を取り戻した朱崩が、宗珀を抱えたまま炎の方へ向き直る。

「し、しまった! やめろ、光雷破は中止だ!!」

朱崩が言い終わる前に、目の前で光芒がきらめくと同時に、地の底から炎が沸き上がり、結界の薄くなったところから炎の河となって流れ出した。

「『壁』、『殻』の結界術が使える者は、全員ですぐにあの炎を抑えろ!」

朱崩の狂ったような叫びに、術師たちが応じる。

——ただひとり、どこかへ連絡を取ろうとする者を除いて。

二十一

緑宝寺の東のあたりを歩いている男がいた。暗い森の中を歩いて行くと、竜の彫り物の入った門が見える。

緑宝寺の東の大門『招竜門』である。

男は、いつもの通り門番に挨拶しようとして…その顔を見て仰天した。

「じよ、浄芥! なんてお前さんが門番なんか…!」

倒魔術師の長はちよつと笑つて、男を中堂へと案内した。

「おや、ちようどいいところへ！」

緑宝寺中央、中堂奥の私室で着替えていた緑宝寺は、覆面を取つて訪問者を迎え入れた。

部屋へ入つた男は四十すぎくらい。小柄でがっしりとした体。かぶつていた葦あしの笠を脇にやると、後ろで縛つた長い髪が揺れる。

男は怪訝けげんそうに緑宝寺の顔を見た。

「何のはなしです……」

と、最後まで言わせず、緑宝寺はその肩を抱きかかえるようにして耳元みみもとで囁ささやいた。とたんに男の顔が驚愕きょうがくの色を成す。

「わかり申した！ すぐ行きましよう。風乗りはいませんか？」

緑宝寺は、黙つてその手を胸元にやる。男の右の眉まゆが釣り上がった。

「しかし、あなたのその術では……」

「ご心配なく、鮑采まづはんどの。『目には目を』という言葉もありましてね」

引きつったよつな微笑みを、鮑采はあえて無視した。

「それじゃ私にも、その覆面を貸して下さい」

手に持った杖を腰紐こしひもに括くりつけ、黒い布をひつたくるように取ると、鮑采は慣れた手つきで覆面を仕立てていった。

二十二

村の西方。光雷破によつてかえつて拡大した炎は、一向におさまる気配が見えなかつた。

術師が十数人がかりでなんとか抑えているものの、村をこね以上壊こわさず、耐え抜けるといふ保証は、朱崩にも出来ない。

朱崩自身もまた、結果維持に加わっている。誰も、終わりの見えない戦いに疲れはじめていた。

「ちつ…剛流の術がありや、水くらい作れるってのに！」

だれかが歯ぎしりとともに吐き出した言葉が、朱崩のカンにさわる。

「源流こそ最強だ！弱音を吐くなっ!!」

そのときだった。黒装束くろしょうそくに身を包んだ二つの影が、『門森』から飛び出してきたのである。

その一つ、杖を持った小柄な方は、炎のそばで印を結ぶ。

やや大柄な方は、川のわずかな水でしばらくじつと身を濡らしていた。

小柄な男は、腰だめに杖を構えて、そのまま姿勢を低くする。やがて『ヤツ』と掛け声一閃、腕は動かないが、全身から吹き出す『光』の奔流ほんりゅうは隠しようがない。

目には見えない『光』の刃が結界を突き破りやぶ、炎の両脇から斜め下へと、えぐるように食い込んで行く。

瞬まはたき一つの間、炎上する家や土全体が、まるで火をつけた団子だんじのような形で宙に浮いた。

結界をむりやり断ち切られた術師たちが、その場に尻餅しじもちを付く。

「なんて奴だ！炎を丸ごと削り取りやがった!!」

「ありや 剛烈破ごうれつは、それも二度いっぺんにかよ」

「ご、剛烈破ごうれつはって…剛流の武形呪まじなじゃないか！」

彼らはそれぞれ驚きのあまり自分の立場を忘れ、ただ呆然ぼうぜんと目の前の出来事を追っていた。

剛烈破を使った術師は、厳しい色をたたえた目のまま、すつ、と影に消えた。

その影から、やはり黒い覆面で顔を覆おほった別の男が、すばやく飛び出した。身体は水に浸ひたされて重くなっているはずなのに、素早い動きで炎団子へ突っ込んで行く。

剛流の男よりやや高い背丈、しかしひよろひよろとした印象は受けない。男は炎の手前で立ち止まる

と両の腕を左右に広げ、中三本の指をピンと立てた体勢で跳び上がった。

わずかに紅いもやのようなものが彼を追いかけるように現れる。と、やがてそのもやは上へ上へと昇ってゆき、それにつれて彼も押し上げられたかのように昇ってゆく。

「朱雀変化か!？」

誰かが素つ頓狂な声を上げた。……いや、この反応は正しい。そう朱崩は思った。なぜなら――

朱崩は内心で、苦い思いを噛み殺していた。口をつく言葉は、それでもやはり冷たい。

「いや、翔炎翼だ」

朱雀変化、翔炎翼。いずれも、源流の術ではない。しかし、すでに自分に手が無い以上、静観せざるをえないのである。

「どつちにしたって、無茶苦茶だぜ」

その通りだ、と朱崩は考えた。風も使わず、空中を行く。こんな術があつていいものか!

なかば八つ当たりである。

そんな思いをよそに、黒覆面の男はさらなる術を使った。……いや、正確にはすでに使っていたと言つべきなのだが

まず気付いたのは宗珀だった。件の紅いもやから、さらに紅い筋のようなものがスツと一本、出ているのである。その源は、と追いかけてみると、黒覆面はいつの間にか片腕をおろし、その手になにやら細い剣のようなものを持っている。かの紅い筋は、ここに発していた。

鳥の形をした柄。剣は鳥のくちばしから、吐き出すように伸びている。

「朱雀…宝剣――」

朱崩はすでに声もなかった。

すでに滅びたはずの衝派極流。そのなかでも随分と以前に失われた剣が、目の前でその威力を発揮しているのである。

朱崩は、自分の中できが崩れて行く音を感じ

ていた。

黒覆面はそのまま、炎団子をぐるりと一周しながらほぼ真下に着地する。次第に迫る紅い珠の方へ剣を向けて、ヤツと掛け声一つ。珠はとたんに紅蓮の膜で覆われた。

「炎を、閉じこめやがった」

「一人でやるんじゃ、すぐ耐えられなくなるぞ」

「そんな気はないだろう。おそらく…」

朱崩がつぶやく。力のないその声色に気付いた数名がはつと振り向く。だが、彼はそれ以上口にしない。いや、口にできないのだ。それは、彼の今までの言動を否定するに等しい。

そんな思いにかかわりりなく、術は進む。

剣に左手の三つ指を添えるように置き、炎の珠を受け止めるように構える。

朱崩がはつとした。

「全員、炎を見るな!!」

そう大声で叫ぶと、自分は目の前に腕をかざし、目を細くしてその瞬間を待っていた。

「極熱破あッ!」

黒装束の男が叫んだ瞬間、凄まじい光が生じた。

それが静まったとき、目の前にはただ黒い焼け跡が広がるだけだった。…そう、そこには、あれほど大きかった炎が跡形もなく消えていたのだ。

あちこちで赤黒く光る燃え残りだけが、それが夢でないことを教えてくれる。

そして、その燃え残りさえも、突然の霧に黒く染まって行った。

朱崩はもう驚かなかった。

ゆっくり振り向いた先から、その霧は流れていた。

『門森』である。

そこでは、おそらく霧を起こしたのであろう術師が、右手に杖を持ったまま軽く一礼すると、剣を持った男と共に門の向こうへ消えて行くところであった。

「なん…だつたんでしよう、いまのは？」
 しばらく、だれもが呆ぼおけていた。延焼を防ぐはずの結果が見当違いのところ、に張はられていることが、そのよい証拠である。

「火で、炎を打ち消したんだ」

それはもつ答えと言つより、自分に言い聞かせていると言つてよかつた。

「そして、あの霧…あれは、森の木々から、水みづ気を吸い出したんだ。たしか、剛流にあつたと思う」

「そこまで、魂が抜けたような声で言っていた彼は、はつと我にかえつた。

「さあ、後片あとかたづ付けだ。家を立て直して、煮炊にたきができるようになるまで終わりはないぞ！」

おうつ、と応じる術師たちが頼もしく思える。

大まかな指示を各部隊の長に出したあと、朱崩しゆぶはふ、と門森を見た。

そして、頭かぶを垂たれる。

「わかりました。私の負けですよ、緑宝寺」

「緑宝寺さま…」

奥堂の椅子いすにもたれて眠っていた空諾が目を開けると、扉の前に女坊の長が立っていた。

「やや、なにかありましたか？」

梨環うしろは後手で扉をもてあそびながら、

「いえ、何やら急いで飛び出して行かれましたので、気になりました…」

緑宝寺は妙な顔でそれに応える。

「おや、私はここを動いていませんよ」

「気のせいですか。では炊き出しの仕上げに参ります。けどそのまえに——」

緑宝寺さま、髪かみが焦こげておいですよ」

そう言つて悠然ゆうぜんと笑つ彼女を見て、空諾は頭かを掻かいた。

「やつぱり、かないませんね。とりあえず、みんなには内緒ないしょですよ」

笑いながら部屋の扉を閉める。その影で、男が三人ばかり立っていた。

「と、いうわけですって」

男の一人が、中に聞こえないように笑った。つられて残りの二人も笑いだす。

「まあ、いいじゃないか。あの人も『粹流』で懲りてるんだよ」

「そつだな。とにかく、緑宝寺のことを想っているって点じゃ、誰も勝てやしないし…」

「じゃ、これからも知らんふりということだ」

全員がうむ、とうなずいた。その拍子に中堂との扉が開く。その明かりに浮かび上がった顔は、仙跳、浄芥、杯岱——すなわち、最高師範たちであった。

注

一 一刻：当時の一刻は、約15分

二 二百五十里：当時の一里は約540m

三 二丈：当時の一丈は約3m

番外二　ときはながれて

一

むかしのはなしである。

彼は、風を受けながら立っていた。

長く、寒い季節の終わりを告げる、あたたかな風。七尺(四)はあろうかという身体に乗った、岩のような顔をなでるように、風が吹きぬけてゆく。

風の中に、ふと、みどりの香りを感じる。もう新たな草が萌もえはじめているのだろうか？

男は表情を変えずに、ただ目蓋まぶただけをゆっくりともち上げた。開いた眼まなこの先には、ただ黄色の大地と、茶色の草だけが広がっている。

と、背後に気配けはいを感じる。腕が勝手に背の皮袋に突っ込まれ…そこで止まった。

「なにほーっとしてるのよー!」

彼は、袋の中で握り締める手をゆっくりと開くと、苦笑しながら取り出した。ずしり、重さが再び背中にかかる。

振り向けば、娘が馬上ばじょうで笑っていた。

男は娘のほうに向かって困ったような笑顔を見せると、また頭をもとに戻して広い大地を見つめた。

(もう、使うこともねえんだよね…)

背中の袋の中身が、さらに重くなったような気がした。

二

いまで言うなら中国のやや北の方。広い草原のあなたに日が落ち、馬たちが足をたたみはじめるころ、彼は自分の天幕テントへと戻っていった。

食事までには間がある。彼は背中の大きな袋を、目

の前の小さな机に置くと、ゆっくりと中身を引つ張り出した。

「ごりごりと音を立てて取り出されたもの、それは斧おのだった。彼の体に見合った大きな斧。しかし、人の丈ほどの樹木すらないこの草原では無用の長物。

彼は、天幕の奥からなめし皮を取り出すと、汚れてもない斧の刃を丹念たんねんに磨みがき始めた。

その姿は、すでにただの習慣でしかなかった。

と、そこにいきなり、『風』が回った。

外に流れる暖かな春の風ではない。目には見えな
い、『なにか』の流れ、それを彼は：彼らは『風』と呼ぶ。

男は斧を拭く手を休め、右目だけでその場所を見る。目ではなにも見えない。だが、そこになにかが集まっているのだ。彼にはそれがわかった。

彼が大きく一呼吸したあたりで、そこに人の姿があらわれた。斧を脇に置き、様子を見ている彼から

見れば小柄だが、普通なら巨漢きよかんと言えるその身体をやや屈かがめ、目の前で拳こぶしをおさえて礼をとる。

「お休みのところ、失礼いたします。岳生がくしやうどの…で
すか？」

呼ばれた男：岳生は居い住ずまいを正す。と言っても、あぐらをやめて隅の小さな椅子いすに腰掛けなおしたただが。

「ん？…：緑宝寺りよくほうじの使いかい？」

相手の青年は、礼をとった形のまま、もう一度頭を軽く下げた。

「はい。不躰ぶじゆな訪問、お許しを。他の方が驚くかと思ひ、直接参上いたしました」

そつ話す青年の顔を、男はしばし覗きこむように見ていたが、やがて口を開いた。

「心遣こころづかいには感謝しとかア。でもよ、まだお前めえの
ことを聞いてねえぜ」

青年はぱつと顔をあげ、同時に拳を押さえたまま

の手を掲げるように高く上げた。

「失礼しました。私は風珀呪の宗珀と申します」

男は苦い顔でふいに立ち上がった。宗珀の手を両手で掴んで礼をやめさせると、机の下から小さな椅子を取り出し、座らせてから元の位置に戻る。

そして、腕を組んだ。

「宗珀…風珀呪？ お前、ひょっとして赤珀大老の弟子か？」

「はい。よく存じて」

青年は驚いて目を見開いた。岳生は大きくうなずいて、

「そうか、あの爺さまも弟子とってたんか…九年だモンなあ。

ん、わかった。爺さまの弟子なら疑いようもねえ。はなしあんたる？ 言ってみな」

「実は…おご存知かと存じますか…」

岳生が苦笑した。

岩の造形が変わって仁王のように見える。これを笑っていると思える者など、そう多くはいないだろう。

「おいおい、慣れねえ言葉なんか使つなよ。俺のことをどう教えられたんか知らねえが、取って食つたりやしねえぞ」

宗珀もまた苦笑した。

「では…つい最近、地震があつたでしょう。そのせいで、緑宝寺の術師がみんな出払ってしまったんですよ」

『術師』——それは、仙人に匹敵する力を持ちながら、歴史の表舞台はおろか、伝承にすら姿を見せない存在である。

岳生と宗珀は、ともに衝派の術師。西の地『緑宝寺』を拠点に、いのちのもととも言われる『光』を用い、宿敵『空魔』を倒すために術を磨く者たち…実際には、そんなに格好のよいものではないのだが。

「なるほど。地震の片付けて誰も手が離せねえから、閑人に雷遊子の護衛をせい、か」

衝派の中でも希な才能をもつ術師見習い、雷遊子とあにも満たない子供の彼は、いまは師の命を受けて旅の途中にあるはずである…たった一人で。

「閑人かどつかは知りませんが…緑宝寺がおつしやるには、あなたがもうそろそろ術師として動きたくなってる頃だろうから、ひとつ仕事をさせてあげては、だそうですよ」

岳生の眉間に皺しわが寄った。

「まあ、誰もつけてねえって方がおかしいやな」

「いえ、すでに泉碓せんすいどのが…」

秀泉碓。仙道にもかかわっている、衝派きつての変わり者。岳生にとっては古くからの知り合いであり、もちろん、その実力もよく知っている。

「なんだ、あいつがいんのか。だったら問題ねえよ。大勢行ったって邪魔まじなるだけ…」

と、目の前に突き出された手に、岳生の言葉が封

じられた。

「じつは、そのこともあるんです。これを…」

宗珀が腰の袋から取り出したのは、白い布に包まれた人の腕ほどの荷物。机の上で包みをほどいた瞬間、岳生の目がかつと見開かれた。

「……正気かい！」

中には、鉄くろがねと木を組み合わせた棒がいく本かと、細く長い刃が一本。奇妙な形の鎖で、各々つながっている。

岳生は、その荷物の重さを確かめるかのように何度か持ちなおし、握りなおしていたが、やがてため息まじりに言った。

「あいつに、これ渡さによいけねえような相手なんか。そりゃ確かに、護衛が一人だけじゃ辛えんえかも知んねえな…」

遠くで、岳生の名を呼ぶ声がする。

「まあ、話あわかった。明日ンでも出るとしよう」

岳生は荷物を再び白い布に包みなおすと、急いで机の下に放り込んだ。

「では、ぼくはこれで」

「悪いな、急かしちゃまって」

宗珀は軽くにこりと顔をくすすと、そのまま空に溶けていった。

岳生は消えたあとをしばらく眺めていたが、はつと我にかえると目の前の大きな斧を、磨いていたなめし皮ごと袋に放り込んだ。それと同時に、天幕の入り口がぱさつと開く。

「いま、誰かいたでしょ？」

年の頃なら十八かそこら。腰まで届きそうな長い三つ編みを、肩から前にたらしただ娘がそう言いながら、ちよっときつい目をして天幕の中を見回している。

「おいおいチャムリ、俺がだれか連れ込んだでるとでも思ったんか？」

チャムリの口が尖る。そのままぱくぱくと口をあけしめしていたが、しまいに一言、

「食事、なしよ！」

それだけ残して立ち去っていった。

チャムリの出でいったあと、岳生はひとり、薄くなめした羊皮に向かつて筆を走らせていた。

慣れていないのか、数文字書いては頭を掻き、また数文字書いては宙を見上げ。なんとか書き上げたものを机の見つけやすいところに置くと、宗珀から預かった荷物と先ほどまで磨いていた大きな斧を袋に詰め込み、そのままふとんにもぐりこんだ。

三

夜中、丸い月が天の頂上を通り過ぎるころ、その光に照らされたひとつの影が、岳生の天幕にもぐりこんだ。

影は机の上の紙切れを取り、暗い中でじつと目をこらしていたが、そのうち脇にあった墨壺に指をつつ

こみ、紙切れの隅になにごとか書き付けた。

大きな荷袋を見つけると、頭から中に入りこんで、なにやら「そ」そとしてゐる。やがて、全身をしゃくとりむしのようにくねらせながら、大きな鋼のかたまりを引きずり出した。

ときおり、何かに引つ掛かつて大きな音がする。そのたび、影はびくつ、と震えて草の布団の様子をうかがい、その主が寝ていると見ると、小さく息をはいて、また動き出すのである。

二刻ほど経つた（注五）たろうが、大きな鋼をなんとか机の下に押し込んだ影は、空いた荷袋に吸い込まれるように入ると、そのまま動かなくなつた。

四

翌朝。地の果てによつやく白いものが見えるころ、岳生は大きな袋を肩にかつぎ、天幕を出た。

しばらく、手足の具合を見るように、ゆっくりと

踏みしめながら歩いてゆく。

十分に寝て体調がよいらしい。あの大斧が入った荷袋が軽く感じられる。

彼は満足げにつなずくと、くるりと向きなおつた。

馬たちはまだ、木の枠に頭をもたれている。そのまわりに大小の天幕が、霧の中の島のように浮かんでいる。

岳生は、そのひとつひとつに向かつて、深く頭を下げた。そして最後に、チャムリの天幕が目に入る。

八年前にこの草原で出会つた女の子は、空魔との戦いで傷つき、岩に身を封じた彼が立ち直るまで、ずっと待つてくれていた。

雷遊子によつてなれば無理やり封を解かれ、再会してから数ヶ月。術師でない、普通の日常に、彼女は欠くことができない。

しかし、いまの彼は術師に戻らねばならないのである。

「ちよつと、行つてくらあ。ちゃんと帰つてくつから、心配すんなよ……」

五

昼過ぎ。まだまだ寒い空の下でも、早足のおかげでうつすらと汗をかき始めた頃、彼の腹も少しだけ軽くなっていた。

飯でも……と思つて彼は思わずぴしゃりと額を叩いた。

「ちつきしよう、めしイ忘れつちまつた！」

幸いにも、あたりはなにもない草原から、やや深い草と低い木々の生え始めた場所。立ち止まって目を閉じれば、そこここに生き物の気配がする。

彼は、背中の袋から斧を取りだそうと、中に手を突っ込んだ。その途端、

「きやー！」

岳生は仰天した。顔のわりに小さな眼が、一気に

拳ほどまで広がる。それも無理はない。袋の中に入つ込まれたごつい手が、斧と思つて掴んだものは、味が悪いくらいに柔らかいものだったのだから。

思わず袋を支えていた腕から力が抜け、それは地面に転がり落ちた。まじまじと見つめる中、見る間にそれは生き返つてゆく。

うなづねとしたその動きをじつと見ながら、岳生の脳裏に、ひとつ嫌な予感が走つた。じわりと近づいて、袋の頭の紐をすべてはずす。とたんに中身が飛び出した！

「あーっ、苦しかった」

飛び出てきたのは長い三つ編み——チャムリだった。

息を呑み、目を白黒させる岳生へ向けて、笑いながらひとこと。

「逃げようつたつて、だめめよ。一生ついてくんだから——」

岳生は大きく息を吐いた。

落ち着いてその姿をよくよく見れば、普段着ているのとは違つ、薄い蒼の短衣シヤツに胡服スボン。その上から、うす紅色ベニの上着を重ね、足は茶の布でこしらえた上に革の旅草鞋たびぞうじ。腰の当たりには小さなかばんと水袋。

…長い旅を承知でいるのは明らかだった。

「わかつたわかつた。もういいから背中ついてこいや。…やなモン見ることになるぞ」

「一緒に見るんでしょ」

にこにここと笑いながらの言葉に、岳生は黙だまるほかなかつた。

六

それから十日ほどは何事もなく過ぎた。

岳生は斧の代わりに、道端みちばたに落ちていた棒きれを持ち、持ち前の体力に任せて日々の獲物えものを得ている。

水はというと、もともと少ない草原でのくらしを活かしているのか、チャムリがどこからともなく見

つけ出している飲み水にしている。

おかげで二人とも、特にこれといった困難もなく長城ちやうじやうの裂け目を越え、人の気配の濃いところまでやってきた。

山も木々が多く、息づいている。岳生は、緑の空気を樂しむかのように大きく息を吸い、森をまぶしそうに見ていた。

「おもしろい顔お」

となりで、チャムリがからかい気味に声をかける。

「こら、なに見てんだい」

普通の人間なら脅おびえてしまつほどの視線をかわし、きやらきゃらと笑いながらチャムリが言う

「だつて、そうじゃない。むかし、あたしたちとはじめて会つた頃なんか、ムスつとしちやつてさ…それがこの顔だもん」

「ま、まあ、いろいろあつたからな」

曲げた人差し指の背で額ひたいを搔く。そのしぐさを見

つめる娘の視線が、急に鋭すどくなった。

「でも、それだけじゃないわね。なんか、懐かしい、ってかおだわ」

岳生の額にあてがった指が止まった。ため息もつかぬ息をはき、顔をくすしながら、

「かなわねえなあ…ま、そんなもんだ。

ずいぶんまえ、まだ術師なりたての頃に、よくここまでできてたもんさ。あいつらと一緒になあ……」

「また、あの人たちのはなしね。えーと、『鉄身てつしん』さんと『神足しんそく』さんと…そうだ、あなたはなんて名乗ったの?」

「名乗ったわけじゃねえが…そう『朱顔鬼しゆがんき』か、な」

「朱顔…って、そんなに可愛かわいかったのぉ!？」

再びきやらきやらと笑う娘の顔を、岳生は困ったように眺めていた。

「術師ってなあ、普通のやつらが使えねえような技もってんだろ。中にも悪いことする奴もいんだよ。ン

で、俺達三人の修行もかねて、そういう奴等やつらを叩たたき潰つぶしてたんさ。

鉄身の妙漣みょうれん、神足の泉碓いづ——衝派三頭竜さんしりゆうりゆう、か。ひよっとすつと、今でも通じるかも…」

不意に、ごうつ、という鈍い音が、あたりに響いた。岳生が立ち止まる。チャムリは回りを見回しながら

「ねえ…なにか変な音、しない?」

「熊かな。このへんはたまに出るみてえだから」

なおもきよろきよると見回す自こが、動く者を捉とらえた。

「あそこ!人が、襲襲われてる!!」

娘は腕を引つ張ひつて、その場所を示している。だが岳生は、そちらを見もせず、

「ほっとけ」

と一言残すと、腕を掴つかまれたまま、まっすぐ歩いてゆく。

「熊でも虎でも、自分の縄張なわばりつてもんがあんだ。知

らねえで入んのはただの馬鹿だし、知ってて入んなら覚悟してるはず。どっちにしても、助ける義理あねえぜ」

と、そこまで言った瞬間、岳生の動きが止まった。目が大きく見開かれ、額からは汗が浮き出している。「この、『光』…」

人には…いや、生きる者には、すべて『光』というものがある。ひとりひとり、微妙に異なる光。術師はそれを『回す』ことにより、さまざまな術を作り出している。それゆえに、他人の中の『光』を感じ取ることができる者も多い。

いま、岳生が感じた『光』、彼はこれに覚えがあった。(な、なんだこいつ…まさか！)

思った瞬間にはもう駆け出していた。最初の二歩でチャムリが振り飛ばされたことにさえ、彼は気付いていなかった。

まず目に飛び込んできたのは、白い服を着た小さ

な少女だった。左手に草の入ったかごを抱え、そのままの姿で前のめりに倒れている。そして、その背後に、小山ほどもある黒いかたまり。

熊である。

(こいつぁ…)

考えるより先に体が動いた。さつと前に飛び出すと、大きな体が少女を覆い隠す。だがそれは、熊の正面に体を晒すことにもなった。

ブンツ

顔のわずか前を、黒い爪の先がかすめて行く。一瞬、目の前が朱に染まる。まぶたの皮一枚、剥ぎとられた。

熊はなかば空振りとなった大きな腕を持って余すかのように、ほんのわずか体を空に舞わせる。

岳生は咄嗟にその中へ飛び込んだ。もう頭でものを考えてはいない。十年も使っていなかった戦いのカンが、いまこの時になって一気に身体中を駆け巡りはじめたのだ。

長い爪が両側から押し寄せる。上からは、逃がすものかとばかりにその大きな黒い顔が襲いかかる。岳生は両腕の付け根あたりを掴んで、ねじりはじめた。

そして、膠着^{じょうちやく}。双方とも動くことができない。もっとも、有利は熊にあった。突つ張つた腕を戻すことのできない岳生に対して、熊はその長い爪でじわじわと攻めたてることが出来たからだ。現に、岳生の肩から脇腹にかけて、細く赤い筋が見る間に増えていった。

うぬ、とひとつ唸^{うな}る。意識がカンから頭へと戻り始める。さてどうするかと考えた刹那^{せつな}、

「えいっ！」

どこで拾ったか、自分の腕ほどの太さの棒を持ったチャムリが、力任せに殴りつけてきた。熊がわずかに頭をずらし、ほんの一瞬だが力がぬける。

岳生は再びカンにまかせた。

突つ張つた腕をほんのすこし緩^{ゆる}め、全身の力を軸足に叩き込むと、その勢いを腕に借りて平手の底で

打ち付ける。

ズダンッ！

そばのチャムリがはっ、とするほどの音を立てて、掌底^{しょうてい}打^うがきまつた。

熊が痛みとも怒りとも思える叫び声を上げる。ありえない方向から爪が来る。とたんに脇腹を一寸^{すん}ほどえぐられた。だがもはや痛みにかまつ余裕はない。

岳生は前に出た。相手の頸^{くび}の両脇^{わき}をめがけ、渾身^{こんしん}の力をこめた掌底とこぶしを叩き込み続ける。その間にも肩が、腰が、そして顔までもが赤いもので濡^ぬれてゆく。

ごくわずかだが、熊の両腕が緩んだ。

今しかない！頭の中でその思いが閃^{ひらめ}いた瞬間、全身の筋肉が勝手に動き出した。

左足が大地に叩き込まれる。同時に上半身が、胴よねじ切れよとばかりに捻^{ひね}られる。包み込むように開かれた熊の爪に腹が、胸が、腕が切り裂かれる。右

肘をぐいと張る。あとすこし、あとすこしで…

現実には一瞬のはず。だが、その一瞬のなんと長いことか!!

熊の頸骨に肘が触れるちょうどそのとき、下半身がようやく回ってきた。

岳生は右足を大地に叩き込んだ。大地を背負ったその力と、溜めに溜めた体のひねり。そのすべてが肘に注がれる。

グオンツ!!

岳生は熊を押し倒すようにして倒れた。これでだめなら…

どれほど経ったのだろうか。

両腕を持ち上げられる感覚に、彼は我にかえった。目だけを背後に走らせる。そこには、さきほど襲われていた娘が、岳生の重い体を必死に持ち上げよ

うとしている。

(ああ、やはり…)

あとから駆け寄ったチャムリが、片方の肩を支えたので、彼はなんとか起き上がった。

「だいじょうぶ? ねえ、あなた、近くに村なんかないの?」

「わ、わたしの住む村があるわ。ついてきて」

まるで雲の上をあるくよう。聞こえる声もとぎれとぎれ。夢つつつの意識が消え始める中、彼はぼそつと言った。

「ずいぶん、大きく…」

その言葉は、二人の娘の耳には届かなかった。

七

「——というわけなんだ。

この辺の村は、みんなあいつらにやられちゃった。放つといたら、この村も…

三頭竜の力、貸しちやくれないか？」
秋風の中、三人の子供に向かつて、男が話しかけていた。

「たしかに、前に通った村も酷いもんだつたよな」
真ん中で話を聴いていた、細身の少年が、うなずきながら言つた。

「ああ。壁つつう壁、みんなぶち壊して、中のモン奪い取つてやがった……ちいと、やり方がひでえ」

顔は子供だが、話しかけている男よりも一回り大きな少年が、むっとした顔で腕を組む。

三人目、左端にいた少年は、いままでずっと目をつむっていたが、やおら目を開けると、他の二人をちらりと見た。

「緑宝寺に伺いをたてる閑はないな。泉碓、岳生、いいか？」

呼ばれた二人が硬い顔でうなずくのを受けて、
「三頭竜、たしかにお受けします」

男は手を組み、膝を落として礼をとつた。

「あいつらは明日、あの李すももの木の下に集まることになつてるそうだ。なんとか逃げ出した村の者が、そう言つてた……」

三人が振り向いた先に、巨木がそびえている。

「李すももつて、あんなもんか、妙連!？」

呼ばれた少年は、だまつて首を振る。

なかば葉を落とした大きな李は、ひんやりとした風に揺れていた――

八

李の花特有の香りが、あたりに満ちていた。

窓の外、とても大きな李が逆立ちさかだをしている。彼は、その光景に何の違和感も持つていなかった。

「あ、岳生。気がついた？」

声をかけられた瞬間、岳生は目の前の風景に妙なものを感じた。みんな、逆さになっている。

やがて、はっと意識が戻る。寝かされていたのだ。

頭を持ち上げる。目の前にはチャムリの顔。彼女が差し出す水袋を取ろうと腕を出すと、身体中が引ひかれた。

よく見ると、あちこちに布が巻き付けてある。脇腹のあたりなど、生々しい朱色に輝いているが、不思議と痛みはない。

「面倒かけたみてえだな」

岳生は布をほどこいて、傷口を見ていた。熊の爪が食い込んだところは、肉がへこんだような形で固まっている。

チャムリはその傷を心配そうに眺めている。

「あたしは、水を汲んできただけよ。ここに寝かせたのも、手当したのも、みんなあの娘」

手足を少し動かし、問題ないと見ると、彼は布をすべて剥ぎとった。

チャムリが着替えを渡しながら言う

「ねえ、あの娘、颯鈴さつりんって言うんだって。

この家、あの娘ひとりだけみたいよ」

岳生は帯を結びながらしばらく目をつむり、額にしわをよせた。

「おかしいな。たしかに親はいねえが…」

「なんで、そんなこと知ってるの？」

目を丸くしたチャムリの後ろから、娘が入ってきた。森の中で見たのと同じ、やや茶がかった白い服。歳はおそらく、チャムリより少し下か。やつれていなければ、さぞかし美人であろうその顔を補うように、長い髪がまっすぐ垂れている。

「気がついたんだ。はい、食事だよ」

差し出されたのは木の椀わん。中は山菜と肉の汁が入っていた。

「あなたが熊を倒してくれたから、久しぶりにお肉が食べられるわ」

岳生は、受け取った椀をじっと見つめた。そして

一言、

「おかしい」

と言って椀を置いた。

「こん村は、このへんじゃ作物が収穫れつとこのはずだ。…熊が出る山の中にまで入るってな、どういふことだ？」

やつれた娘の顔が、さらに曇る。

横から、チャムリが肩に手を置いた。娘…颯鈴はその手と、チャムリの顔を見つめ、ぼつぼつと話しはじめた。

「この南の山に山賊がいるの。ずっと昔からいてね、いままでは一年に一度、畑でとれたものの五つにひとつをあげる代わりに、この村を守ってくれてたの。だけど、去年は違つた。とれたもの、ほとんど持つてつちやつて、村には食べ物がなくなつちやつたの。だから、あの山まで、食べられる草を採りに行つたのよ。」

始めは、大人の人が行つてたんだけど、みんな山で熊に襲われちゃつて…父さんや母さんも…」

そこで思わず涙ぐむ。

岳生は腕を取り、肉の切れ端だけを避けると、さめた中身を一息に流し込んだ。そのあとから、固い肉をくちやくちやくと噛み締める。

颯鈴の顔を抱くようにしていたチャムリが、岳生の顔を迷子まじこのような目でちら、と見た。

岳生は目をつむり、肉を飲み込むと、一言。「で、その山賊ってな、どこにいるんだ？」

九

このあたりでは珍しいほどに木の生おい茂しげる山の中。祠ほこりのよつなちいさな建物がそこにあつた。

岳生はその扉を二度ばかり叩くいて、大声を張り上げた。

「この山の又シの住まいはここでいいンかい！」

中の方で、どたどたと足音が響く。

やがて、扉は勢いよく開いた。

「赤麒麟せききりんと知つて言つてんのか！」

飛び出してきた若い男は、右手に鉈なたを持ち、殺気ころつき立った表情で相手を睨にらんでいる。

岳生はにやりと笑った。

「ああ、んじゃやっぱりここでいいんか。迷ってほかんとこ来ちまったかと思っただぜ。

で、長おきに会いてえんだがよ、どうすりゃいい？」

若い男は、睨にらんだままで動かない。…いや、動けないでいた。ふた回りは大きい身体からだのせいではない。なにか、圧倒されるものがあつた。

「兄あにい、きつとこいつですぜ。こないだふもとの村で熊をなぎ倒したつてえ奴…」

後ろから、小柄な男が口を挟はさむ。それで彼は、余計に動けなくなった。山賊メソツの面子はまと、下の者へのしめしと…

さらに後ろから響いた声が、彼らを救った。

「なんだ、騒さわがしい」

出てきたのは三十なかばの男。熊の皮の上着をは

おり、腰には小さな斧。岳生には及ばないものの、相
当な巨漢である。

「あんたがここの長かい。俺あ岳生つてえ旅の者だ
がよ、ちいと訊ききてえことがあつて山やま寄よらしても
らつたんだ」

言いながら、腰ほどもある包みを差し出す。

長が片手でほどくと、中には熊の肉が薫製くんせいにされ
てつまっていた。

「熊あ倒したつて奴か。で、訊きくつてな、なんだ」

「あんたあふもとの村に、ひでえちよつかい出して
るようだな。なんでだい？」

長は口をへ、字に曲げた。

「旅のあんたにや、関係ねえ話じゃねえか？」

「白辰はくしんのおやつさんが見たら泣なくぜ、きつと」

あたりがざわめいた。長は息を呑み、大男を検分
している。

「何でおやつさんの…前の長なが名前知つて…

おめえ、何者なにものだい!!？」

「だから、岳生だつて言つてんだろ。さあ、どうなんだい！ 答えによつちや、俺あいのち投げてもいいんだぜ!!」

岳生の拳が震える。長は口を曲げたまま大きくうなずいて、岳生を祠に招き入れた。

山賊たちが十人ほど、囲むように立ち尽くす中、長と岳生は丸い卓をはさんで席につく。

岳生の持つてきた熊の薫製と、濁り酒にごりざけが卓に乗ったところで、長の方が口を開いた。

「あんたあ知つてるようだが、俺達おれたちや別に追いはぎするわけじゃねえ。

この山から目の届く村あ守つてやる代わりに、色々もらつてンだけだ」

腕組みをした岳生がうなずく。

「だがこの冬だ。この冬、この辺の村にな、とんでもねえ暴れもんが来ちまった。

この南にある村ふたつ、丸ごと壊しやがつてよ、我

が物顔で居着いてやがる」

卓の上に置かれた長の拳に力が入り、卓がみじみしと音を立てた。岳生は腕を組んだまま、その拳を冷たい目で見ている。

「暴れもん、か。そんぐれえの奴にやられたあな。赤麒麟も墮おちたもんだ」

立っていた山賊の一人が、ぱつと飛び出し、岳生の肩を掴む。岳生が目をやる。相手はさつき、祠の入り口で突つかかつてきた男だった。

「相手は仙人せんじんだぜ、仙人！ 弓も鉈も、わけのわからねえものに弾はじかれちまう。村の倉だつて、壁かべつてえ壁ぶち壊して中身奪つてくん。これをどうしろつてんだよ!!」

岳生の目が、異常なまでに鋭くなった。組んだままの腕の中で、拳が握りこまれる。

肩を揺ゆすられる感覚で我にかえるまで、一刻はかかったように感じた。もちろん、実際には一瞬のたろうが。

彼は腕組みを解いて、肩を掴んだ腕を軽く押さえた。そして、長の方を見る。今度の視線は、冷たくはなかつた。

視線の先で、長のあごが大きく引かれた。

「そつか。ンなら、そいつらさえいなけりゃ、とりすぎた分、返してやれンだな？」

今まで通りにできるな？」

「俺たちや官吏じゃねエぜ。百姓いじめたつて面白かアねえよ」

間髪を入れず、長が答えた。岳生はにやりと笑い、肩の手を払いのけた。

「わあつた。そのかわりつてわけじゃねえが…武器をもらえねえかな？」

「斧ならあなせ」

くい、と首で合図をする。脇にいた三人ほどが奥に入り、しばらくすると、なにやら重そつな荷物を抱えて戻つて来た。

「この祠の裏にや洞窟があつてなあ。こいつあ、洞穴

の守り神らしいが、あんたにや丁度いいんじゃねえかな」

にやにやとしたその顔からして、からかっているのは明らか。しかし岳生はお構いなして斧の握りに手をかけた。

右の肩から腕にかけて、山のように盛り上がったかと思つと、斧がゆつくりと持ち上がる。岳生の顔に笑みが入る。斧の先端が地を離れる。と、斧は不意に宙を舞つた。

追つように岳生が立ち上がる。左手の指先が握りの先をひよい、とかすめたかと思つと、斧はくるりと半回転。卓にその先端が突き刺さると思える刹那、岳生の右手が刃の平をすくうように持ち上げる。地面と平行になつた斧を左手で握り、右足を軸にしてぐるりと一回転。鼻先をかすめてゆく大斧に、赤麒麟の長がびくりと飛びのく。

岳生はそれを右手に持ちかえ、今度は大きく縦に

振り回す。背中から前へ。と、振り降ろされる斧が目の前を通る瞬間に、身体ごと大きく前へ突き出した。そこにいた山賊すべてがのけぞる。だれもが、首を飛ばされたかのような錯覚に陥った。

岳生は、突き出した斧をゆっくり引き戻すと、眼前に掲げて一礼した。

「いい斧だなア。これ、借りていいんかい？」

赤麒麟の長は汗まみれの呆れた顔で口をばくばくとしていたが、なんとか一言だけ言った。

「そりやお前エが使うためにあるようなモンだぜ」

十

——土煙、土煙、土煙。

その中にときおり、白っぽい閃光が走る。そのたびに、断末魔の悲鳴が轟く。

やがて、煙がおさまったとき、三人の少年が、そこに集まっていた。

瘦せた少年が、回りを見回す。

「これで終わりかな？」

「みてえだな。全部で十五人か」

他の二人より頭ひとつ大きい少年が応えた。

「うん。思ったより楽だった…どうした、妙？」

やや離れて、ひとりしゃがみこんでいた少年が、顔だけ振り向く。

「…変だ。誰も抵抗しなかった…」

他の二人は妙漣に近づくと、黄色い大地に座り込んだ。

「しなかつたんじゃなくて、できなかつたんじゃねえか？」

大柄な少年の言葉に、妙は大きく首を振った。

「それじゃ、なおさらおかしいよ。はなしと違う。そんな弱い連中が、村を襲えるわけないじゃないか」

言いながら、両手を上下に決め、目をつむる。

「そっぴや…おい妙、なにしてんだ？」

妙漣は片目だけ開いた。

「二人とも手伝ってくれ。息のあるの探すんだ」
しばらく三人の少年は、じつと座ったままあたりを探しまわっていた。人の…生きて、いる人の中にある『光』を探しているのである。

やがて妙漣が指し示した場所には、一人の男が倒れていた。

泉碓が、その頭の上で水袋をぶちまける。びっくり、と動いた男の肩を、岳生が揺さぶった

「あんたたちが、村あ襲ったんだろう!!」

いやな予感がする。その思いを振りはらおうと、力の限り、岳生は叫んだ。

だが男は、ごくわずか首を振った。

「ち…がう」

「う、嘘をつけえ!?!」

岳生の目が血走っている。

男が目をあけた。三人の子供達を、目だけ動かし、それぞれ眺め、大きく息を吸う。

「いずれ…わ、かる。
俺達のは…気にしなくていい。ただ…あの村を、あの子たちを——」

十一

赤麒麟の山の南にある、そこそこの大きさの村。

この村は、確かに半壊していた。

壁という壁が壊され、素通しになった家の中には、妙な形にねじれた人だつたものが、ちらほら見える。

そんな中で、ひとつだけ壁の残る建物があった。

恐らくは倉であろう、高造りの建物。賊がいるとすれば、ここに違いなかった。

岳生は、大きな袋を背に背負ったまま、その倉に向かつて歩きだした。

倉の前には大きな広場。

ゆっくり歩く岳生の頭がわずかに痛む。なにか、嫌な予感がする。十年前の戦いのカンを呼び戻し、あ

たりの気配を見据える彼の足元で、地面がいきなり爆発した。

ズンッ！

「おうおう、誰か、かかったぞ」

大きな倉の中から、四人の男がゆっくりと出てきた。

もつもつとした土煙が上がり、あたりのすべてを覆い隠している。

男たちは、笑いあいながら煙の方へと歩いていった。

ある者は酒壺しゅぼをかかえ、またあるものは肉片を啜くえ。

バカな相手をつまみにしようと、囲むように近づいていった。

そのとき、である。

なにかが、煙の中から飛び出した。

男たちの一人に向け、大きな旋風つむじが走る。

両手の三つ指を軽く曲げて印を作り、そのまま腕

をぐいと引く。

目はあくまで前を見つめつつ、まっすぐに走り寄る。

男に反応する余裕はなかった。

わずかに腰をかかめて両腕を盾代わりにするのが精一杯である。しかし、相手は殴りなぐかかりなどしなかった。

「剛杵こうし衝つ!!」

引かれた腕の前面で景色がゆがむ。

人の中にある『光』、普段はみえるはずのないこの『内光』だが、あまりの集積度のために、その背後の景色を歪ゆがめてしまったのだ。

打ち出せない代わりに莫大ばくだいな力をもった内光のかたまり、それがこの術の正体である。

目の前の相手が吹き飛んだ。

岳生は背中せなかの袋から大斧をつかみ出すと、吹き飛ばした相手に歩み寄っていった…

——村に戻った少年たちが見たものは、ぼろぼろに壊れた家のあと。それは、先に襲われた村と、まったく同じ姿だった。

「くそっ……」

地を叩く音がする。巨体が、地に膝をついていた。ほかの二人は、呆然と立ち尽くしている。

そのとき、目の前の家から、袋があらわれた。そのはしからは、玉の器や肉のかたまりが覗いている。三人が見つめる中、くるりと振り向いたその顔は賊の退治を頼みに来た男だった!!

「光・雷・破!」

妙漣と泉碓が、まったく同時に術を放つ。相手の顔が見えた瞬間のことである。避けられるはずもない。二つの光雷がぶつかり、大袋が弾け飛んだ。

黄色の煙があたり一面に広がる。一刻ほどして、煙がおさまったとき、そこにはぼろぼろになった人間

が倒れているだけだった。

術をしかけた二人は拳を握り、唇を噛みしめながら立っていた。

そのあいだを、大柄な少年がゆらりと歩いてゆく。

「岳、どうした?」

横を通り過ぎた岳生の目に狂った光を見た泉碓が、おそろおそろ訊ねる。

「術師の術あ、血が出ねえんだ

血が出ねえから、やってつことがわからねえ。

血が出ねえから、人殺しがわからねえ!」

岳生は、すぐ脇に落ちていた小さな斧を拾い上げ、屍に近づいていった。

妙漣には彼の心がわかった。しかし動けない。

「岳…おい、岳生! やめろ——」

バシッ!

鈍い音が周囲に響く。わずか遅れて、しゅっ、と細い音。それとともに、鮮血が吹き出す。岳生はそれを斧で受けると、斧の平たい面を顔に押しあてた。右の頬がぎらぎらと輝く朱で塗りこめられる。見開いた目もそれにまけじと鬼神のごとく輝いていた。首のない屍を睨みつけた鬼は、その目を上にあげると一言つぶやいた。

「俺達は…人殺した」

その視線をまともに受けた相手は、知らずに数歩下がっていた。

「岳生…しゅ、『朱顔鬼』岳生!! 死んだはずじゃ!!」

「ひ、怯むな! 剛杵衝なら動きながらは打てん。散って距離をとれ!!」

ふっ、と二人が空へ溶けた。『風』に乗ったのだろう。岳生はぼっ、と駆け出し、また先の構えをとった。

「剛杵衝!!」

地が裂けるかのような叫びとともに、空がゆがん

だ。その中から男が一人落ちてくる。…ついさっき風に乗ったはずの男が。

男は混乱していた。目の前の朱い顔を見てもわけがわからない。

朱い願の鬼神は表情一つ変えず、背中から斧を取り出した。

ふしゅっ

彼の顔に、朱の部分が増えた。

(剛杵衝ほど光雷を集積すれば、風の流れもゆがむ。だから、『風』に乗った奴の行き先を読んで、そこで術を使えば…)

「泉碓…」

一部始終を見ていた男たちは愕然とした。『風』でも逃げられないとしたら、どうすれば…

「け、結果だ。俺が背負って逃げてやるから、無諺界を張るんだ!!」

もはや見^み采^えもない。結界を背負^{みか}った二つの影が、山のほうへと逃げてゆく。

朱の鬼はその後を旋風^{つむじ}のように追いかける。あと数丈に迫^{せま}ったところで、鬼はやおら動きを止め、息を整えて構えた。

相手はさらに一丈逃げる。鬼は両腕を脇に構えたまま、足首だけをぐつと動かして、数丈の距離を一気に詰めた。

「剛杵衝!!」

結界に体当たりするようにして両腕を突き出す。と同時に結界がすべて鬼の腕に吸い込まれ、そのまま結界を張っていた男に向けてあふれ出した。

（剛杵衝つてのは、上半身動かせないんだろ？ だったら、足首鍛^{きた}えて、そこだけで跳んで行けば…）

「妙漣…」

朱の鬼が斧を取り出したとき、そこにあつたのは首

のねじ曲がった屍と、右足のちぎれかけた人間だった。

「ひ、ひっ…」

腕だけで必死に逃げる男を尻目^{しりめ}に、朱顔の鬼は屍の首をはねた。

そしてそのまま足音をさせないように振り返ると、一動作で最後の首に斧を入れた。

生きる者のなくなつた原に、朱にまみれた鬼が一人立っている。

日が傾くにつれ、鬼は、次第に人へと戻っていった。遠くに大きな李が見える。凜^{りん}としたその姿を見つめながら、岳生は歩いていった。

「妙漣、泉碓…」

知らず、思いが口に出る。

「俺あ、いつまでたつてもおめえらの世話になつてんだよなあ…」

十四

李の木の近くでは二人の娘が待っていた。

岳生の姿を認めたチャムリが飛び出す。

「やったのね、岳生！ さつき、山賊の人たちが来てさ、一年分の食料を戻して…」

そこで、言葉が途切れた。

横で、颯鈴も息を呑んでいる。

岳生の巨大な顔が朱に染まっている。傷一つないのに。

どれほど多くの血が流されたか、娘たちにも明らかだった。

「チャムリ、帰るか？」

緑宝寺に頼みや、風乗りの一人くらいよこしてくれねえこともねえだろう…」

笑ったような口調だった。

(でも…)

チャムリはそっと近づくと、岳生の両肩を掴んで

押し下げた。

「？」

押されるままに屈んだ顔に、チャムリの頬が押し付けられる。彼女はそのまま両頬ではおずりした。

「こ、こらーんなことしたら…」

すつと離れたその顔も、岳生にまけないほど朱くなっている。

「これで、おなじだよな」

当惑した顔の岳生が、あきらめたように頭を垂れる。その頭をチャムリが抱きかかえるように撫でていた。

そばでこわこわ見ている颯鈴には、岳生の朱い鬼のような顔が、とてもやさしく微笑んでいるように見えた。

彼女はゆつくりと近づくと、そばにしゃがみ込んで、声をかける。

「お礼、しないといけないよね。でもどうしよう。お

金はないし……」

岳生がチャムリの肩を軽く叩いた。

チャムリの腕が離れてから、彼は何でもないと叫んだ。
た声で言った。

「そんなら……あんたでいい」

「え？」

乾いた血糊が、音をたててはげてゆく。

「今日から、あんたはオレのもんだ」

十五

——その村でただひとつ残った家の隅には、三人の子供が押し込められていた。

三歳ぐらいの女の子が二人、その間に、布でくるまれた赤子が一人。

妙漣と泉碓が女の子を抱き上げる。岳生は赤子を掴み上げ、そのあまりの柔らかさに、思わず落としてしまった。

そのとき、三人は同時に頭痛を感じた。ただの頭痛ではない。術師に特有の、爪で握られるような痛み……空魔の気配が強まったのだ。

おのおの型を決める。『光』が回り、痛みが薄れてゆく。もつとも素早く立ち直った妙漣が、思わず息を飲んだ。

腕の中で、幼な児が暴れている。

「二人とも、これ！」

見れば、泉碓の腕でも、子供がじたばたと動きまわっている。

「まさか……」

大きく息を吸い、再び『光』を回す。今度は、子供たちに向けて。女の子たちは、すつ、と眠ってしまった。

この術に、落ち着かせる効果などないのに。

「この子、空魔の気を……！」

「こつちの子もだ。……どうする？」

妙漣と泉碓が、顔を見合わせる中、太く、重い声

が響いた。

「つれてこつ」

声の先では岳生が、手の中の赤子を握ってしまわないよう、苦心している。

「また空魔の気が強まりや、こいつら耐えられねえぜ。それにこの子たちやあ、俺たちの恥の証拠だ…だから、連れてこつ！」

乾いた顔の血糊ちのりに、ひびが入る。

「そつだな。でも、その子は置いて行かないか？」
岳生の抱えた赤子は、さきほどからからずつと眠っている。

「ん。術師にならずにすむんなら…まあそのほうがいいかもしんねえ」

岳生のため息まじりにつぶやく声に、赤子がむずがる。

りいん…その首についていた鈴がひとつ、軽い音をたてた。

「いい音だ」

泉碓の顔に笑顔が戻る。

落ち着きなくあたりを見回し、なにことかぶつぶつ言っていた妙漣が、その一言に反応した。

「李すいもの木に、鈴か。…つん、そうしよう」

「？」

いぶかしげな顔の二人を交互こたごに眺める。腕の中の女の子を、あやすように持ち上げると、その寝顔に笑いかけた。

「名前さ…この子たち、離はなれ離はなれになるなら、せめて名前くらい、似たのつけておいてやるつよ。」

姓は李、名は…そつだな、麗鈴はなねに華鈴、小さいのは颯鈴はなねでいいかな——」

十六

困いのあるやや大きな町が見えてきた。

颯鈴は浮かぬ顔で、ぼおつと岳生の後ろ姿を見続けていく。

岳生は村を出て以来、まったく口を開いていない。脇にいるチャムリは、数歩おきに岳生と颯鈴をちら、ちら、と眺めている。

やがて、宿らしき建物の前で、岳生の歩みが止まった。

彼は懐ふところから、ぼろぼろになった財布さいふを取り出すと中をあらため、無言のままのれんをくぐる。

「お泊まりですか。それじゃ、お名前を…」

岳生は後ろの二人をちらりと見ると、わざと大きな声で言った。

「東家村とうかそんの住人で東岳生。後ろは妻のチャムリと娘の颯鈴！」

その顔が真っ赤に変わる。血糊めくは拭い取ったはずなのに。

二人の娘は顔を見合わせ、同時に吹き出した。振り返った岳生の両腕に、おのおのぶら下がるように抱きつくくと、呆気あきげに取られる宿の主人を尻目ししめに、笑いながら奥へと消えていった。

むかしのはなしである

注

四 七尺：当時の一尺は約30cm

五 二刻：当時の一刻は約15分

六 一寸：当時の一寸は約3cm

あとがき

総集編の二つめ...の、再編集版です(^_^;)

最初の二本で一度まとめたのですが、残り一本が長いことバラになっておりましたし、表紙に使っている月桃紙^{げつとう}も手に入るようになりましたので、この際まとめてしまおうかな、ということでこのような形になりました。

...覚悟はしていましたが、やはり100pのコピー誌(^_^;) 数が出ないことを前提としていますね。心構えとしてはよくないかもしれせん。

解説ではありませんが、内容について少しばかり書きます。

- 『闇に降る雪』
 - 雷遊子捜索の救援部隊をそろそろ到着させようかな、などと考えながら舞台を設定しました。...これ以上延ばすと、『北岩』にたどり着く前に私がくたばりますので(-_-;))
 - 泉碓の過去に深く触れるべきかどうか、ちょっと迷いましたが、番外ではないということでカット。その反動が『ときはながれて』の方に吹き出しています。
 - この話だけではありませんが、漢字が難しいというご意見を頂きました。このため、この話以後ルビを振る基準を変えてあります。
- 『いのちの綱』
 - 初の番外編。緑宝寺の概略紹介と同時に、術師が決して万能ではないところを見せたかったのですが...
発行時期が関西の大地震とぶつかってしまい、ツメが甘くなってしまいました。総集編にする際、この話はほぼまるごと書き直しています。

- 『ときはながれて』
 - 番外編その2。雷遊子が出てこない話は番外扱いにしていますが、時間は全部連続していたりします。
 - 最終話のようなタイトルだと言われました(^_^;)まあ、脛にキズ持った人たちだらけなのですが、少しは立ち直ってほしいなあ、という親心です。

さて、ここにまとめた話は結構長いことお出ししていたせいか、ご意見も頂いております。そのなかで『慶治』という名前が中国人っぽくない、というのがありました。

実はこの人『治術』の師範なので名前の最後は必ず『治』になるわけなのですが...その辺の説明をする機会がなかなかありませんでしたので、ここに書いておきましょう。

術師の名前のことを『呪名』と言います。原則として三文字で、それぞれの文字のことを『師名』『呪名』『術名』と呼びます。『呪名』が二つの意味で使われていますが、単に『呪名』と言った場合は慣例として三文字の方を指します。

このうち、厳密に本人を特定する名前は一文字の方の『呪名』です。『師名』は師匠の『呪名』がそのまま使われますし、『術名』は師範資格を得る術の名前を使うからです。

例としては、本巻には出てきていませんが、麗鈴が一番わかりやすいでしょう。彼女の呪名は『泉麗鈴』。このうち、最初の『泉』は師匠である『秀泉碓』の『泉』、最後の『鈴』は『鈴術師範』であることを示します。

一文字の方の『呪名』は師匠が決めます。一文字であること以外にあまり制限はないのですが、宿敵である空魔の『空』と『魔』は使用を禁じられています。

...あれ？じゃあ緑法寺の名前『空諾』はなんなのでしょう??

『いのちの綱』の、空諾と朱崩のやり取りの中でちょっとだけ書きましたが、彼はもともと衝派源流の術師ではありません。『空』の呪名は彼だけに特別に認められているのです。ただし、先に書いたとおり弟子の名前にも『空』が入ってしまいますから、「弟子をとらない」という条件つきです。

このあと、『空』の文字を持つ人が出てきますが、彼もまた弟子を取ることなくこの世をあとにしました。

『空』の文字は、常に一代限りなのです。

では最後に、この本を手にした(手にしてしまった方も含めて)すべての方に感謝の意を表しつつ、この拙文を終わらせていただきます。

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K”もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしくお願いいいたします。

追記：私の書く文は、基本的にコピーフリーです。コピーしたいなんていう奇妙な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付

発行 酒処 金井亭

発行日 平成十三年十二月三十日 (第一版)

連絡先 〒240-0026 横浜市保土ヶ谷区権太坂1-23-7

三谷 淳